改訂 女子新國文 巻四

375.9
Ha7
資料室

42233
教科書文庫
4
810
42-1927
200030
1906

昭和二年一月十二日
高等女學校國語科用

文部省檢定濟

文學博士 芳賀矢一 編

改訂 女子新國文

四卷

東京
合資會社 冨山房 發兌

資料室
375.9
H27

子太皇德聖人哲　六三　　筆作英田和　子太德聖

広島大学
教
53578
図書

改訂

女子新國文　卷四　目次

一　明倫歌集より……一
二　今上陛下の御幼時……石井國次……四
三　心の洗濯（自修文）……柴田鳩翁……一三
四　日本人の今昔……幣原坦……一八
五　童心……北原白秋……二二
六　植物と詩歌……三好學……二九
七　秋夜の曲……川路柳虹……三三
八　小さい旅人……薄田泣菫……三四
九　文鳥（自修文）……夏目漱石……四二
一〇　配所の菅公……四九
一一　菅公の夫人……山田新一郎……五二

一三 鐘聲……落合直文…六一
一三 日光より……德富健次郎…六二
一四 枯林……吉江喬松…六六
一五 雪と霰（自修文）……薄田泣菫…七二
一六 冬枯の大井川……千葉龜雄…七七
一七 夕もやの野……中西悟堂…八三
一八 甲冑堂……（高等小學讀本）…八五
一九 ベートーベン……前田三男…九〇
二〇 月光の曲（自修文）……（高等小學讀本）…九四
二一 國歌の話……夏目漱石…一〇五
二二 元日……（和漢朗詠集）…一一二
二三 朗詠……一一三
二四 家の紋……一一七

二五 七福神（自修文）……一一九
二六 努力と奮鬪と嗜好……幸田露伴…一二九
二七 近江聖人の幼時 その一……村井弦齋…一三三
二八 近江聖人の幼時 その二……村井弦齋…一三七
二九 雪晴……白鳥省吾…一三三
三〇 樹木と雪と人（自修文）……前田夕暮…一三五
三一 土器賣る翁……柳澤淇園…一三八
三二 武藏野の二月……中西悟堂…一四〇
三三 珊瑚礁……山崎直方…一四七
三四 春を待つ歌……（高等小學讀本）…一五三
三五 靜かな春……生田春月…一五五
三六 哲人聖德皇太子……高島米峰…一六一
三七 日本國民と自然美……一六八

三八　清淨潔白（自修文）……一三
三九　飯の味……相馬御風……一七八

改訂　女子新國文　卷四

一　明倫歌集より

世をさまり民安かれと祈るこそ
わが身につきぬ思なりけれ
　　後醍醐天皇

山はさけ海はあせなん世なりとも
きみにふた心あれあらめやも
　　源實朝

山はさけ海はあせなんとも
　　紀貫之

(一)第九十六代。
(二)鎌倉三代將軍。頼朝の第二子。承久元年（一八七九年）場公曉に殺された。年二十八。
(三)歌人。天慶九年（一六〇六年）歿。

世の中に思あれども子をこふる
おもひにまさるおもひなきかな　藤原兼輔[一]

ひとの親の心は闇にあらねども
子を思ふ道に迷ひぬるかな　菊池武時[二]

ふるさとに今宵ばかりの命ともと知るに直に自分の命なれども
知らでや人の我をまつらん　九條道房[三]

咲く花の梢を見ても思ひ出づる
つらなる枝の枯れし名殘を　松平定信

埋火のあたりのどかにはらからの
まどゐせし世ぞこひしかりける　藤原兼輔

あたらしき年の始のうれしきは
ふるき人どちあへるなりけり　平兼盛[一]

世の中にうれしきものは思ふどち
はな見てくらす心なりけり

天地の神やかためし萬代に
たてて動かぬ國のみはしら　村田春海[二]

(一)歌人。承平三年(一五九三年)歿。年五十七。

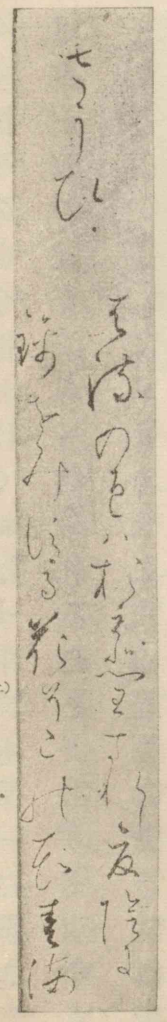
(一)吉野朝の忠臣。肥後の人。元弘三年(一九九三年)戰死。年四十二。

(三)東山天皇に仕へて左大臣攝政となつた。

(一)歌人。正暦元年(一六五〇年)歿。

さうひ
はるの色はおもひわすれし夏陰に
錦をみする花そこの花　春海

(二)國學者。文化八年(二四七一年)歿。年六十六。



村田春海筆蹟

(一)御名は裕仁。

令德記憶

徹底的

二　今上陛下の御幼時

石井國次

今上陛下の御令德おほくおはす中にも、第一に驚き奉るのは、御記憶の拔群にあらせられることであります。今まで多くの生徒に接してまゐりましたが、陛下のやうに御記憶の強い方は、見受けたことがありません。蟲の名でも、貝の名でも、聯絡も系統もないことまで、一度御覺えになつた以上は、決して御忘れになるといふことがありません。

この御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、なんでもよい加減にして置くことが御嫌ひで、詳細に御質問になり、また御自分で徹底的に御研究になるのであります。例

三寶

へば、歴史で聖德太子のことを申し上げると、御歸りになつてから參考書を御調べになり、聖德太子の憲法とはどんなものか、三寶とはどういふことと御研究になる。理科で蝶の御話を申し上げると、蝶類圖說を御調べになつたり、盛に御採集になつたりして、日本產の蝶は勿論、外國產のものまでも御觀察になる。或

今上陛下

は電氣の御話を申し上げれば、種々な器械を御取寄せになつて御實驗あそばされ、無線電信や電話のことまで、すつかり御理解になるといふ風であります。旅行、登山の御趣味も

豐富にいらせられ、單なる御運動としての外に、地圖や案内記をよく御調べになり、そこの産物や、動物、鑛物から氣象のことまで熱心に御研究になる。萬事がかういふ風であらせられるから、御知識が確實で、かつ深みのあらせられることは、實に驚嘆し奉る外はありません。

明治神宮に參拜して明治天皇の日常御使用になつた御調度品を拜觀したものは、誰でもその御質素なのに感泣しないものはないと思ひますが、陛下もまたその御遺傳のせいか、御感化のせいか、御生來贅澤が御嫌ひでいらせられます。それですから御學用品なども、全く一般學生と同樣なのを御用ひあそばされ、鉛筆などは、當時一錢五厘の鷲印のを

裨益

好んで御使ひになり、しかも、それが非常に短くなるまで、決して御棄てになりません。消ゴムも當時四五錢くらゐなものを、豆粒ほどになるまで御使用になり、御帳面でも、半紙や畫用紙でも、決してむだにはあそばしませんでした。それで大正三年三月陛下が初等科を御卒業あらせられると、陛下のこの御高德を一般兒童に知らしめたら、さぞ國民教育に裨益するところが多からうと考へて、陛下の御使用になつた背嚢、教科書、雜誌、筆入から、帳面、鉛筆、ゴム、その他陛下が御製作になつた手工品、圖畫、標本などを拜借して一室に陳列し、御教室や御控室などすべてを公開して、一週間市内及び近縣の小學兒童に拜觀せしめたことがあります。その時、毎

日何千といふ兒童が、校長や教員につれられて參り、私どもは手わけをしていろいろ説明をいたしたのでありますが、女の子で可しか、京橋(一)か日本橋あたりの學校と思ひますが、幅の廣いリボンなどを着けて來たなり綺麗な服裝をして、一組がありました。私がその女生徒たちに説明をしてから、「皆さんは殿下さへかやうに御質素であらせられることを拜見したら、もう立派な着物だの、幅の廣いリボンなどを家庭でおねだりができないでせうね。」といつたら、感激して、大分泣いた生徒がありました。

陛下はまた非常に規律正しいことが御好きでいらせられます。朝の御起床から御拜、御食事、御通學、御復習、御運動、御

(一)東京市京橋區。

入湯、御寢まで、實に規則正しい一日の御日課を御守りになつて、御變更なさることはめつたにありません。隨つていろいろなことをあそばすにも、總べて規律正しい計畫を立てて、組織的にあそばすといふ御性質であらせられます。

それから陛下は公平無私な御方であらせられます。例へば、戰爭ごつこをなされたあとで、私がその審判をして、勝敗をきめ、講評などをする時に、御自分の方に不利なことであつても、決してお隱しなさらずに、御申出になる。角力で陛下が相手を投げられて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣が付かなかつた少しの踏切でも御自分にあると、「これは私に踏切があつたから負であります。」と御主張になる。審判官や

講評

理路井然

行司が少しでも不公平な裁判をすると、非常に御嫌ひになる。仲間のものが、「その方が都合が好いではありませんか。」などと申しますと、「そんな不正直なことはいけない。」と仰せになる。御判斷に決して私心を挾まれない。それであるから、歷史上の事實を御批判なさる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案をお下しになる。實に陛下の御心は、さながら少しの曇もない明鏡であらせられます。それ故陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと寫し出されて、少しも隱すことができないのであります。

陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の少い方で、御世辭などは仰せられないが、誠に思ひやりの深い御方であらせられる。隨つて御幼少の時分から、普通の子供にありがちな、友だちをいぢめるとか、意地わるいことをなさるとかいふやうなことは、決してありませんでした。そして、友だちに對しても、御側のものに對しても、好き嫌ひといふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍從や侍從武官などに對しても、新舊の區別なしに、優しく御接しになるさうです。しかも舊いものをいつまでも御忘れにならずに、元の侍女だの御學友だのが御伺ひ申しますと、大變に御喜びになりますし、また時々の御召もあります。私どもにも無論その通りで、御誕辰やその他の御祝にはきつと御召があり、御機嫌伺に出れば御喜びになつて、特別に

一視同仁

拜謁を許され、御暇の時はいつまでも御引止めになつて、お話し下されるのであります。先年御外遊の時には、私はロンドンやパリで御迎へ申し上げましたが、屢、御召を蒙つて御陪食を賜はり、内外諸名士の前でも先生先生と仰せられるので、覺えず身の光榮に感泣した次第であります。これは實に教育者の天職に對する無上な光榮でありませう。人心がだんだん荒んで、師恩を忘れるどころか、全く念頭に置かないやうな學生の多い今日、陛下のなされ方は、實によい模範ではありませんか。

陛下の御盛德を稱へ奉ると、まだ澤山ありますが、要するに、陛下は御天性實に間然するところのない立派な御方で、誠に神々しい御性質を、御生まれながらにしてもつていらつしやると申し奉る外はありません。

—教育研究—

間然するところがない

自修文

三　心の洗濯

柴田鳩翁(一)

江戸神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或日例の通り一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣歩いたが、どうしたことやら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見れば、はや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらぬ。これはつまらぬ。この大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ちあすは釜の中に蜘蛛の巣がはる。どうしたらよからうと工夫しながら、いつの間にやら両國橋を渡り、本所の屋敷町を「大根。大根。」と賣歩いた。

(一)心學者。京都の人。天保十年歿。（一八三九）年五十七。

日ざし　日のさしぐあひ。

八つさがり　午後二時過。ひどく腹のへつたのをいふ。

釜の中に蜘蛛の巣がはる　たく米がなくなる。

知行　生活のもとで。

月代　もと男が髪を半月形にそつたこと。さかいき。

百に三把　一把三十三文。

懸直　實價より高くいふ直。

かぶり頭。

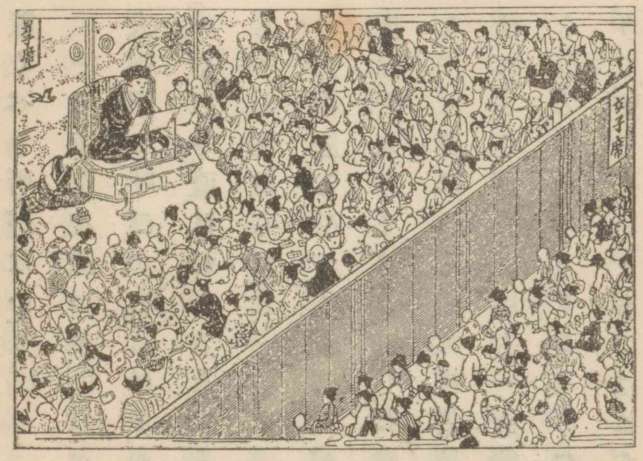
或御屋敷の表長屋の窓の内から、「これ大根屋。」と呼ぶ。やれうれしや、まづ知行にありついたと、呼ぶ所を見れば、表御門から右へ三つ目の窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が、表御門から荷を擔ひこんで、お長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀のうち、門口には何某と標札が打つてある。

荷を持ちこんで見れば、縁先の障子をあけ、旦那殿が今月代を剃られたと見えて、鏡立に向かうて自分の髪を結ひながら、「その大根はいくらぢや。」といふ。「百に三把でございます。」といへば、「それは高い。二十四文づつにして置け。」といはれる。賣りたさは賣りたけれども、現在損のたつことなれば、「どうぞ三把にお買ひなされて下されい。けさから江戸中を泣歩いて、まだ一把も賣れません。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、懸直は一切申しません。」といふ。かのお侍かぶりふり、「それでも高い。まからずば、まづよしに

しやうもやう　もなく　どうともしかたなく。

（盥）

せう。」と言捨てて、縁先の障子をはたと締められた。



心學の講義

大根屋もいろいろというて見ても、かのお侍が相手にならぬ。そこでしやうもやうもなく、「はてつまらぬ。もう日の入には間もなし。なんでも四百の錢を持つて歸らぬと、親子五人があすの命が繋がれぬ。なんとしたものであらう。」と、手を組んで思案をしながら、縁先の金だらひにふつと目がついた。障子は締めてある。あたりに見る人はなし。かの金だらひを水の入つたまゝで、大根二三把の下へそつと隱す。怖いものぢや、今まで

ぬからぬ顏　油斷のない顏。

廣かつた世界が、立ちどころに狹うなつて、五尺の身體を暫くも置くべき所がない。

そこで荷を擔いで、門口を出ようとすると、障子の內から「これ大根屋。」と呼びかけられる。ぬからぬ顏で「まかりません。」といふと、「いやいや、直はねぎるまい。その大根買はう。」といひさま、障子をさらりと明けられた。

大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ、「何把ほど入りまする。はした賣はできません。」といふ。「いやいや、はしたでは買はぬ。その大根皆買はう。この緣先へ並べてくれい。」といはれる。さあ大根屋も一所懸命。障子の締つてあるうちなら、金だらひの出しやうもあらうに、今更金だらひが出されもせず。というて、賣るまいともいはれず。逃げて行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず。千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろうろ

われは　汝は。
きつう　ひどく。

根性　こゝろね。

氣だて　きまへ。性質。
氣色　やうす。

としてゐると、かのお侍が、大根屋の顏をきつと見て、「われはきつううろたへてゐるぞよ。まづ金だらひから出して、大根の數を數へて見よ。」といはれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるか、ぶたれるかと、わなわな震へながら、かの金だらひを耻づかしさうにそつと出して、土に手をつき、「旦那樣、眞平御免なされて下されませ。何を隱しませう。先刻も申しまする通り、けさからまだ一文の商もいたしませず、このまゝ歸りますると、あす親子五人が食べますことがなりません。悲しい貧のぬすみ根性、面目次第もござりません。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命をお助けなされて下さりませ。」と色青ざめて、土にあたまをすりつけて、わび言をする。

かのお侍、思の外氣立のよい人で、更に立腹の氣色も見えず。「いやいや、そのわび言には及ばぬ。まづ大根の數をよんで見よ。」とい

はれる。こはごはながら、大根を縁へ積上げたところが二十三把。かのお侍、大根賣を呼んで、「さあ、その方がいふ通り、二十三把七百六十四文、序に金だらひを添へて遣す。貧のぬすみとはいひながら、われが根性はよほど汚れてあると見える。この金だらひは、顏や手足を洗ふ道具なれども、心の洗ひやうもあるものぢや。持つて歸つて、とつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ。」と言捨てて、障子を締めて內へはいる。かの大根屋もこれから本心になつて、夜晝働き、三年目には遂に相應な八百屋になつたといふことであります。

——鳩翁道話[一]——

(一)鳩翁の講話をあつめた書。

四　日本人の今昔

幣原坦

(一)ポルトガル人は鐵砲を傳へ、(二)オランダ人は醫學を傳へて、(三)西洋文明の價値をわが國に認めしめたことは古い話であるが、オランダ人が平戸から(一)出島に(二)盤居して、わが國との貿易を獨占するについては、種々な暗示をわが國に與へてくれたわが國人は文明の進歩した西洋人に國を奪はれることの可能性が多いのを見て、なんとかして國を護らねばならぬ必要に氣がついた。國を封鎖して耶蘇教を禁じ得た間はよかつたが、幕末に大勢が急轉して、もはや長夜の眠から覺めざるを得なくなつた。(三)吉田松陰がペリー(四)一行に附隨して米國に渡ることを企てたのも、これによるのである。

(五)一八六六年突然、(六)二人の日本青年がニューヨークのオランダ派の傳道事務所に現れた。幹事が驚いて來意を尋ねると、二人がいふに、「自分等は(七)フルベッキ先生に英語を習つて、

(一)Portugal.（葡萄牙）
(二)Holland.（和蘭）

(一)長崎縣北松浦郡。元龜二年（一二三二年）南蠻品貿易場と定められた。
(二)德川時代長崎に在つたオランダ人の居留地。
(三)幕末の志士。長門藩士。安政六年（一八五九年）斬に處せられた。年二十九。
(四)Commodore Perry. 米國の水師提督。嘉永六年日本に來賀に上陸した。松陰が渡米を企てたのは、翌安政元年再度の來航の時。（四年—一八五一年）
(五)慶應二年。
(六)伊勢佐太郎と沼川二郎との二人。

歐洲に渡つて見たが、晩かれ早かれ、日本は歐洲の餌食とならねばならぬ。今の中に大船巨砲の製造法を學ばないと國が亡びるから、それを學びたさに、大西洋を渡つて米國に來ました。」幹事はとにかくそのいふがまゝに、(一)ニュージャーシーのラトガーズ大學の附屬中學に入學させたといふ。これ(二)誠に、當時の日本人の考をよく告白してゐるものである。

或時(三)ニューヘーブンに町田といふ日本青年があつた。某將軍の塾に宿泊してゐたが、米國の學友に耻辱を與へられたといふので、將軍に請うていつた、「自分の同窓生の一人は、自分に耻辱を與へました。どうぞ短刀を以て復讐することを許して下さい。」凛然たる日本青年の當年の氣慨をよく表

(一)Guido Fridolin Verbeck. オランダ人。安政六年宣教師として來わが國に來た。明治三十一年東京で死んだ。年六十九。

(一)New Jersey. 米國大西洋岸の州。

(二)Rutgers.

(三)New Haven.

してゐる。さうして、勝手に同窓生を脅迫せずして、監督者の許可を請うてゐるところなどは、さすがに情を抑へる武士氣質が顯れて、人を感動せしめる。

このやうな氣分で、維新の際のわが國人は皇謨をも翼賛し得たのである。男子ばかりかと思ひきや、(一)一八七一年岩倉大使一行に附隨して、けなげにも渡米した(二)五名の女子さへあつた。そのうちの年長者は上田悌子で、それが漸く十八歳、最も若かつた津田梅子女史は、まだ九歳の小兒であつた。日本人の齎勃たる氣魄は、徳川氏三百年の鎖國を以てしても、消磨せしめることができなかつたのである。

——世界の變遷を見る——

(一)明治四年岩倉具視を大使として歐米へ遣された。

(二)上田悌子、吉益亮子（十六歳）、山川捨松（十二歳）、永井繁子（十歳）、津田梅子。

五　童心

北原白秋

聖心は童の心である。

越後の良寛禪師(一)は、殊にこの童心の持主であつた。かういふ話がある。

一に童男、童女、二に手毬、三にお彈き。これが禪師の三好といふこれで見ても、良寛樣がどんなに子供が好きで、子供たちと遊ぶことが、またどんなにうれしかつたかが思はれる。

その良寛樣も、子供たちには隨分ばかにされて、盛になぶられたり、からかはれたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で一所懸命に遊んでゐた良寛樣が有難い。

(一)越後出雲崎の僧。詩歌を善くし、草書に巧であつた。天保二年(一八三一年)歿。年七十四。

或時、例の通り子供たちと隱れんぼをして居られた。鬼になつた良寛樣が目を瞑つて「もういいよ。」といふかはいい聲を、一心に待受けて居られる、と、ちやうど日の暮れ時で、子供心の何がな欲しくなる時である。

良寛

家々の燈がちらちらつきだすと、子供たちは急に遊をやめて、一人殘らず、こそこそと歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛樣も何もうつちやらかしである。無論いくら待つても「もういいよ。」といふものはない。そのうちに日が暮れ、長い夜が來た。さうして、とうとう夜が明けてしまつた。良寛樣はそれでも一所

懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ所に、同じ姿をしたまま、「もういいよ。」と子供が呼ぶのを待つて居られた。その心の素直さ、さうして、その誠の篤さ、正直さ。

それからまた或時のことである。良寛様が今度は隱れることになつた。そこで見つけられては大變だといふので、早速田圃の稻叢の中にもぐりこんで、それはかはいらしいことだ、それはそれは小さくなつて、まるで二十日鼠のやうに、頭からすつぽりと藁を被つて、おどおどして居られた。すると子供たちはまた例の通り、一人殘らずこそこそと歸つてしまつたのである。それを良寛様は少しも御存じない。また日が暮れて夜が來て、また夜があけた。稻叢には霜が眞白に

置き、朝の日が昇りはじめると、百姓がやつて來て、なんの氣もなく稻束をやにはにはづすと、おやつと驚いた。良寛様が小さくなつて、もぐつて居られる。「おや、良寛様が。」といふと、あわてて、「そつとしろ。そつとしろ。子供が見つける。」

その心のあどけなさ、有難さ。まるで子供である。

また或日のことである。その良寛様が、男の兒や女の兒たちとお彈きをして居られた。沙門良寛全傳に、「禪師頗る大勝を博して、賭物のいり豆を多く得。」と書いてあるから、よほどの乘氣であつたらしい。ちやうどその時誰かが入つて來た。そして、「おやおや、良寛様、なかなかあなた様はお彈きがお上手で。」と褒めると、罪がないこと、良寛様はぼうつと面を赤く

なさる。まるで少女のやうに、さもさも耻づかしさうに、そつとそのいり豆を膝の下におし隠したといふ。その心の初々しさ。そのきまりのわるさ耻づかしさは、全く佛の前に子供らしくおとなしく身を謙る心である。尊い聖心はすべてこの童心を源にする。

もう一つお話する。

或時、赤々と實がうれて、鈴なりになつた柿の木の下で、小さな子供が一人泣いてゐた。良寛様が通りかゝつて、どうしたんだと圓い頭を撫でてやると、あの柿が食べたいといふ。「よしよし、それではわしが取つてあげる。泣くのではないぞ。」といひながら、やつとこさと木の上にはひあがつた。枝につ

かまつて、あれかこれかと探してゐるうちに、それは全く旨さうな柿の實だ、一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの。良寛様は夢中になつて、嚙るは嚙るは、まるで猿蟹合戰の赤いお猿のやうに、むしやむしやと食べてゐる。下にゐる子供こそあはれである。それを見て火のやうに泣叫ぶと、始めて良寛様も氣がついた。さあ、しまつた。これはといふので、あわてて枝を搖つたといふ話。思うてもそのあわて方のをかしさ、罪のなさ、眞正直さ、その子供らしさ、全く涙がこぼれるほどうれしいではないか。

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童の昔からそのまゝである。それは何物にも換難い、二つとない尊い天

（鰈）

禀である。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。或日父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。そこでまたまた叩かれた。「親を睨むやうな奴はかれひになるぞ。」これを聞いた良寛樣の榮坊は、外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ家内中大心配で、あちらこちらと搜し索めると、或濵邊の岩の上に悄然とたゝずんで、沖の方ばかり眺めてゐた。

「榮坊どうした。」といふと、榮坊いはく、「おらまだかれひにならねいか。」

かれひになるといはれたので、ほんとにかれひになると思つて、一心に海を視つめて顫へてゐた童心の正直さ。これ

生一本

をこそ生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

聖心はこの童心を源とする。

——洗心雜話——

六　植物と詩歌

三　好學

植物の美を詩歌、俳句、文章等で表すことは昔から行はれてゐる。これは歐米各國の文學にも見るところであつて、殊に詩聖ゲーテの作などにも多く出てゐる。これ等の場合では、植物の形や色の美しいところを、そのまゝ記載的に表すのではなく、理想を加へて、人間の性情などを譬喩的に示すものが多い。ゲーテの公孫樹の詩などはその一例である。

公孫樹は日本から外國へ渡つたもので、その時代は西暦一千七百五十四年、即ち今からは百七十年前である。ゲーテはドイツのエナ(一)の植物園に自ら公孫樹を植ゑたので、それが今は可なり大きくなつてゐる。余が嘗て同地に行つた時、同植物園長は親しくこれを見せてくれた。

(一) Jena. ライプチヒの西南五六哩。有名な大學がある。

親和

ゲーテは公孫樹の葉が眞中から少し裂けてゐるのを詩的に觀察して、二つの心が一つになつて親和した場合に譬へたのである。公孫樹は日本の植物であるから著しいが、その外にも、いろいろな草木、蘚苔などを詩化したのが澤山ある。すべて外國で最も賞觀する花は薔薇で、ちやうど日本で櫻を愛するやうであるから、隨つてその變種變形が夥しくできてゐる。或學者の計算によれば、薔薇の品種は大約六千種もあらう。これはつまり培養の結果から起つたのである。

薔薇が歐洲へ傳來した歴史、並びにこの花が文學、宗教、美術、工藝その他さまざまな人事に應用されたことは、ドイツの或植物學者の「薔薇」と題する書物に委しく述べてある。

薔薇はかやうに何人にも賞愛され、愛の象徴として、古い時代から詩に歌はれてゐる。また薔薇以外の植物では、椰子の葉は勝利の意を表すことになり、またオリーブ(一)の葉は平和を意味し、月桂樹の葉は名譽を表してゐる。これ等は皆いづれも古い頃からの考であるが、また中には、もつと新しく意味をつけたのがある。例へば、おじぎさうは感觸の意を表

(一) Olive.

（含羞草）

隱逸

し、蘆は氣の迷ふ有樣を意味してゐる。またわが國では、松竹梅の三つはめでたいことに用ひられ、牡丹は富貴の相、蘭は節操の高いこと、菊は隱逸の情を表すなどいろいろある。尤もこの中には、支那から傳はつて來た思想もある。

花の色に因つても、さまざまな意味をつけてゐる。例へば、外國では白色は無失の意味に用ひ、赤色は愛の意、綠色は希望、黃色は熟心、青色は眞實、黑色は悲みを表してゐる。またわが國では白色は清淨潔白を意味し、赤色は眞心を表し、黑色は惡心を表し、青色は未熟を示すなどの違ひがある。これ等の色もまた花や葉にあてて、それぞれ詩歌の材料になる。

外國の詩や畫では、薔薇を題材としたものが多いやうで

筆耶八平田福　丹　牡

あるが、わが國では櫻の歌が最も多い。昔から花といへば櫻に限つてゐるくらゐで、櫻の歌は實に數が知れぬ。皆その花の美しいこと、趣の高いことなどをおもしろくいうてある。櫻の外には梅、蓮などがある。また松、竹、朝顔、すゝき、つゝじ、萩、柳などいづれも歌の好材料となつてゐる。——植物生態美觀——

（芒）
（躑躅）

七　秋夜の曲

おとなふ

川路柳虹

いつか寂しくおとなふは、
庭の樹の間を過ぐる風、
雨かとばかりおどろけば、
落葉は金にみだれたる。

池の水ぎはのはこやなぎ、
今宵はひとりうなだれて、
訪ふ人もなきつれなさを、
片われ月にかこちけり。

—温室の花—

八　小さい旅人

薄田泣菫

私たちが七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けてくると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

雁よ棹になれ。
棹になつたら鉤になれ。

と、その長い行列が漸次に雲の中ににじみこんでしまふまで、聲を涸して叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少くなつて、今では晝間その長い列が空を渡ることは、よくよく人氣遠い野原かどこかでないと、めつたに見られなくなつた。

その頃はまた後の岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雜木林に、小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥といふと、私は海などを越えてくるあの小さい旅人の、あわたゞしい旅を考へて、いつもいはうやうのない寂しい旅心地を覺える。

まづ百舌がくる、秋の彼岸が過ぎて、そろそろ日影が黃色がかつて來ようといふ頃、私たちはどうかすると暖い日の午過、そこらの木立で甲高い鋭いその聲を聞くことがある。

矮小（楡）

「あゝ、もう秋だな。」と思はず振反つて見ると、矮小なくぬぎにまじつて、ずばぬけて背の高いにれの木に百舌が一羽止つて、黄色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきらきらしてゐるのが見える。私たちはその瞬間、いはうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覺える。

（鶺）

次にはひたきがくる。山家の午過、だるさうなきりぎりすの聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寢返を打つ音までがはつきりと耳に入る靜けさの底に、どこやらやつれた人の溜息とでもいつたやうな微かな聲が洩れて來て、なんの音ともわからない。すると樹蔭のにら畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を擧げ

（韮）

る拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうに小鳥がついと身をそらして、逃げて行つてしまふ。それがひたきだ。

（きたひ）

ひたきといつたら、まるで悲哀を抱いてゐる人のやうに、大抵は連にはなれて、たゞ一人で出てくる。そして、そこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよくり、ひよくりと輕い御辭儀をして、さゝやくやうな聲で唄ひだす。私はそれを見ると、他の爲、世の中の爲といつたやうなわけでなく、自分一人の爲に唄つて、それで滿足してゐる人たちを思ひ出さ

もんどり打つ

ずにはゐられない。

ひたきが來てものの十日と經たぬ間に、四十雀がくる。この鳥はひたきと違つて、十羽も二十羽も群を組んでくる。山から里へ移るをりなどには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そして、そこらの木立におりるなり、眩しいほどすばしこく、雀のたごなどを啄き廻しながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せて、透徹つた銀の鈴を振るやうな聲で、早口にしやべり續けるで、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない灰色の產毛そのまゝの雛兒が交つてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返ることもあ

ませた身振

きさく

るが、そこはまた馴れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で、樹肌のひゞを啄いたりする。まるで山家育のすばしこい、きさくな魂そのものを見るやうな氣持がする。

（鷦鷯）

小雪がちらつく頃になると、みそさゞいがくる。これはひたきと同じやうに、大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにしてくる。冬の初の午過、山近い田舍の小家で、爺さんは火燵に潜りこんで、こくり、こくりと居眠をする。その側で婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に檐につるした干菜の影が見すぼらしく映つて、時をりちつぽけな小鳥の影が、ちらついたりする。どうかして、絲目が切れ

て、睡さうな錘の音がぱつたり止むと、こそこそと掛菜をむしる音がするが、老人の耳にそんな音の聽取れようはずがない。婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい、ひよいと、小刻みに籬を傳はつて、隣から隣へと、狹

いどさそみ

苦しい物蔭を出たり入つたりして移つて行くのだ。それがみそさゞいである。

みそさゞいと後先になつて頰白がくる。冷たい雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頰白が灰色の胸までぐしよぬ

れになつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の啼聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな火の用心。

今度は便に金十両、

やりたいけれど、一文もござなく候。

と言傳へるのを思ひ出して、しみじみと世渡のむづかしさと、旅心の寂しさとを思はずにはゐられない。

後の雜木林にこんな小鳥がくる頃になると、野にはもうそろそろうづらが來、しぎがくる。

自修文

九　文鳥

夏目漱石

(一)鈴木三重吉。小説家、文學士。廣島の人。

伽藍のやうな　お寺のやうな。ここでは、だだつぴろく大きなこと。

夢に文鳥を云云　文鳥のことを思ひながら寢た心持。

大儀　たいそうであること。おくくふ。

明るみ　明るいところ。

三重吉は鳥籠を丁寧に箱の中に入れて、縁側へ持出して、「ここに置きますから。」といつて歸つた。自分は伽藍のやうな書齋の眞中に床を展べて、冷やかに寢た。夢に文鳥を背負ひこんだ心持は、少し寒かつたが、眠つて見れば、不斷の夜の如く穩かである。

翌朝眼が覺めると、硝子戸に日がさしてゐる。忽ち文鳥に餌をやらなければならなかつたと思つた。けれども起きるのが大儀であつた。今に遣らう、今に遣らうと考へてゐるうちに、とうとう八時過になつた。し方がないから、顔を洗ふついでをもつて、冷たい縁を素足で踏みながら、箱の蓋を取つて、鳥籠を明るみへ出した。文鳥は眼をぱちつかせてゐる。もつと早く起きたかつたらうと思つたら、氣の毒になつた。

(瞼)

華奢　よわよわしく、しなやかであること。

文鳥の眼は眞黑である。まぶたの周圍に、細い淡紅色の絹絲を縫附けたやうな筋が入つてゐる。眼をぱちつかせるたびに、絹絲が寄つて一本になると思ふと、また圓くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾けながら、この黑い眼を移して、始めて自分の顔を見た。さうして「ちゝ。」と鳴いた。

自分は靜かに鳥籠を箱の上に据ゑた。文鳥はぱつととまり木を離れた。さうして、またとまり木に乘つた。とまり木は二本ある。黑みがかつた青軸を、ほどよい距離に橋に渡して、横に並べた。その一本を輕く踏まへた足を見ると、いかにも華奢にできてゐる。細長い淡紅の端に、眞珠を削つたやうな爪がついて、手頃なとまり木をうまく抱へこんでゐる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥はすでにとまり木の上で方向を換へてゐた。頻りに首を左右に傾ける。傾けかけた首をふと持直して、心もち前へ伸したかと

思つたら、白い羽がまたちらりと動いた。文鳥の足は向ふのとまり木の眞中あたりに、具合よく落ちた。「ちゝ。」と鳴く。さうして、遠くから自分の顔をのぞきこんだ。

自分は顔を洗ひに風呂場へ行つた。歸りに臺所へ廻つて戸棚をあけて、昨夕三重吉の買つて來てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、また書齋の縁側へ出た。

三重吉は用意周到な男で、昨夕丁寧に餌を遣る時の心得を說明して行つた。その說によると、むやみに籠の戸をあけると、文鳥が逃出してしまふだから右の手で籠の戸をあけながら、左の手をその下へあてがつて、外から出口を塞ぐやうにしなくては危險だ。餌壺を出す時も、同じ心得でやらなければならないと、その手つきまでして見せたが、かう両方の手を使つて、餌壺をどうして籠の中へ入れることができるのか、つい聞いて置かなかつた。

自分は已むを得ず餌壺を持つたまゝ、手の甲で籠の戸をそろりと上へ押上げた。同時に左の手で開いた口を塞いだ。鳥はちよつと振返つた。さうして「ちゝ」と鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の處置に窮した。人の隙を窺つて逃げるやうな鳥とも見えないので、なんとなく氣の毒になつた。三重吉は惡いことを敎へた。

大きな手をそろそろ籠の中へ入れた。すると、文鳥は急に羽ばたきを始めた。細く削つた竹の目から、暖いむく毛が白く飛ぶほどに翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺とを、とまり木の間に漸く置くや否や、手を引つこました。籠の戸はぱたりと自然に落ちた。文鳥はとまり木の上に戻つた。白い首を半ば横に向けて、籠の外にゐる自分を見上げた。それから曲げた首を眞直にして、足の下にある粟と水とを眺め

（顎）

た。自分は食事をしに茶の間へ行つた。

その頃は日課として小説を書いてゐる時分であつた。飯と飯との間は、大抵机に向かつて筆を握つてゐた。靜かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞くことができた。伽藍のやうな書齋へは、誰もはいつて來ない習慣であつた。筆の音に寂しさといふ意味を感じた朝も、晝も、晩もあつた。しかし、時々はこの筆の音がぴたりと止む、また止めねばならぬをりもあつた。その時は指の股に筆を挾んだまゝ、手の平へあごを載せて、硝子越しに吹荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが濟むと、載せたあごを一應つまんで見る。それでも筆と紙とが一緒にならない時は、つまんだあごを二本の指で伸して見る。すると緣側で文鳥が忽ち「千代。千代。」と二聲鳴いた。

筆をおいて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いたまゝ、

淡雪の精　淡雪が化して、できたもの。

とまり木の上から、のめりさうに白い胸を高く突出して、高く「千代。」といつた。三重吉が聞いたら、さぞ喜ぶだらうと思ふほどな美しい聲で「千代。」といつた。三重吉は「今に馴れると『千代。』と鳴きますよ。きつと鳴きますよ。」と受合つて歸つて行つた。

自分はまた籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨んだ首を二三度竪横に向け直した。やがて一團白い體が、ぽいととまり木の上を扱け出した。と思ふと、綺麗な足の爪が、半分餌壺の緣から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つくり返りさうな餌壺は、釣鐘のやうに靜かである。さすが文鳥は輕いものだ。なんだか淡雪の精のやうな氣がした。

文鳥はつと嘴を餌壺の眞中に落した。さうして、二三度左右に振つた。綺麗にならして入れてあつた粟が、ばらばらと籠の底にこぼれた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微かな音がする。また嘴

を粟の眞中に落す。また微かな音がする。その音がおもしろい。靜かに聽いてゐると、丸くて細やかで、しかも非常に速である。菫ほどな小さい人が、黃金の槌で瑪瑙の碁石をつゞけざまにたゝいてゐるやうな氣がする。

嘴の色を見ると、紫を薄く混ぜた紅のやうである。その紅が次第に流れて、粟をつゝく口先の邊は白い。象牙を半透明にした白さである。この嘴が粟の中へはいる時は非常に早い。左右に振蒔く粟の珠も非常に輕さうだ。文鳥は身を逆さまにしないばかりに、尖つた嘴を黃色い粒の中に刺しこんでは、膨んだ首を惜氣もなく左右に振る。籠の底に飛散る粟の數は、幾粒だかわからない。それでも餌壺だけは寂然として靜かである。重いものである。餌壺の直徑は一寸五分ほどだと思ふ。自分はそつと書齋へ歸つて、寂しくペンを紙の上に走らしてゐた。緣では文鳥が「ちゝ。」と鳴く。

をりをりは「千代。千代。」とも鳴く。外では木枯が吹いてゐた。

—漱石全集—

一〇　配所の菅公

むかし顯基(一)中納言といふ人は、「罪なくて配所の月を見ばや。」といつた。月夜の玲瓏隈なき光は、俯仰天地に愧ぢることのない心を以て眺めてこそ、肝膽相照らす友である。眺められる月に一點の曇もなく、眺めるわが心に一塵の汚もない麗しさ。良心の眞澄の鏡は、即ち皎々たる月の光に外ならぬ。

心靜かに月を見て、靜かに月を樂しむ人は、世に一人の友もなく、一介の同情者なくとも、誠に天地の廣い人である。天地に愧ぢない人である。

(一)源顯基。後一條天皇に仕へた。永承二年(一〇七〇年)歿。

配所

俯仰天地に愧ぢず

肝膽相照らす

眞澄の鏡

一介

(一)延喜三年(一五六三年)歿。年五十九。

清朗明徹

老境

罪なくて配所の月を見た人は、菅(一)原道眞であつたらう。

海ならずたゞよふ水の底までも

きよき心は月ぞ照らさん

菅公左遷（吉原雅風筆）

の一吟を味はつて見れば、公の心は清朗明徹である。なんの犯した罪もないのに、右大臣の高官から落されて、大勢の子供も散り散りばらばら、稍老境に入つた身を以て、筑紫のはてに棄てられた當時の公の境遇には、何人も深く同情しなければならぬ。公の行は餘りに月のやうに明白であつた。公の心は餘りに月のやうに皎潔であつた。公が秋月に問ふといふ詩には「爲問未曾告終始。被掩浮雲向西流。」とある。公の左遷は公の光明を嫉んだ浮雲の所爲であることは、昔も今も知らぬ人はない。公が月に代つて答へる詩に「天迥玄鑒雲將霽。唯是西行不左遷。」と自ら慰めてゐるのや、秋夜の詩に「月光似鏡無明罪。」とあるのを見ては、公の心は光風霽月、何等一點のやましいところのないのがわかる。

(一)九月十日の夜、月影清く、蟲の音涼しい配所の秋には、前年の御遊をおもひ出して、

去年今夜侍清涼。　秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。　棒持毎日拜餘香。

皎潔

(一)延喜元年。

口吟

心づくしの月影

(一)本居宣長の子。文政十一年(一八二八年)歿。年六十六。

と口吟されたかつては九重の雲居の上に見た月を、今は配所の月と詠められた公の心事は察するに餘りあるが、公のやうな僞のない心を以てこそ、月に對しての問答もできるのである。公が配所の慰藉は、梅よりも、菊よりも、家郷の書信よりも、恐らくは心づくしの月影であつたらうと思ふ。

なかなかに心づくしの浮雲も
ひかりを添ふる有明の月

本居春庭(一)

一一　菅公の夫人

山田新一郎

菅公の夫人は京都の北野天滿宮(二)の西の御座に祭られてある。夫人は菅公に別れて數年の後には、棲むべき家もなく

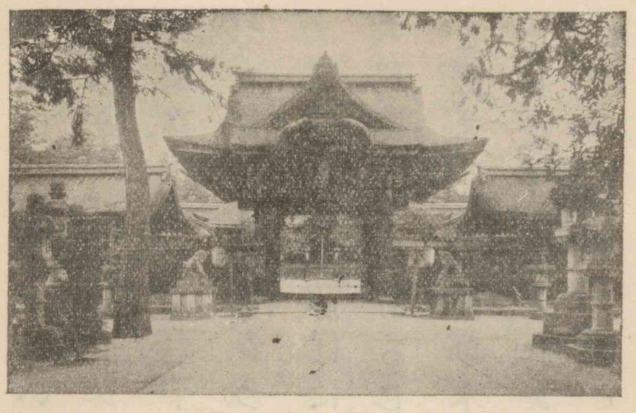
(二)宇佐中社。京都市上京區馬喰町に在る。本文の作者はそこの宮司。

寄寓す

(一)第六十代。

有數な

なり、吉祥院といふ菅家の菩提寺の一室に寄寓してゐられたので、普通吉祥女と稱へられてゐる。昌泰二年夫人が五十歳に達した時、醍醐(一)天皇がわざわざ祝賀の勅使をお遣しになつて、從五位下をお授けになつたといふ外には、夫人の傳記は多く傳はらないが、當時有數な賢夫人であつたことは考へられる。菅公の御子方はなかなか大勢であつたが、上の方の御子方は、四人までも菅公と同時に諸國に流されたほど、そろうて相當な位置



北野神社

内助

に出身されたところから見れば、その訓育の功は、公一人だけには歸せられまい。夫人の内助も與つて力のあつたことと思はれる。

延喜元年一月二十五日、菅公が俄に太宰權帥に左遷されて、二月一日都を立つて行かれる時、

東風ふかばにほひおこせよ梅の花
あるじなしとて春な忘れそ

と詠まれたのは、草木に寄せて最愛な夫人に別を惜しまれたものともいはれよう。西遷の途すがらも、都への便にことづけて、

君が住む宿の木ずゑをゆくゆくも

琴瑟の情

掃撤

かくるゝまでにかへり見しはや

と盡きぬ名殘を惜しまれたのも、即ちこの夫人に對してであつた。以てその琴瑟の情もしのばれるのである。

夫人が京都の留守邸に於ける獨居の様子は、菅公の作られた太宰府の詩で多少窺はれる。公が太宰府で衣食住共に缺乏し、悲慘極る二個年の月日を送られたに比べて、京都の方もまた劣らぬ境遇であつたことが想像される。菅公の太宰府で詠まれた詩の中に「雪夜家竹を思ふ」と題して、「家僕は早く逃散しぬ。寒を凌ぎて誰か掃撤せん。」といふ句があつて、留守宅では下男も逃げた様子だが、雪押竹の雪を拂ひ除けるものもあるまいと、故郷のことを氣遣つて居られる。この

食祿

はしたない

權門

詩は延喜元年即ち「去年今夜」の詩を詠まれた年の冬の作である。一朝にして右大臣を罷められ、食祿に離れ、しかも大臣暮しで育つた御子たちは大勢ある。留守居の夫人の苦勞が一通りや二通りでなかつたことは、申すまでもあるまい。こんな困難な家、しかも御咎を蒙つた菅家のことであれば、はしたない下男どもも早々に逃出して、權門に走つたものと思はれる。夫人はかゝる困難を凌いで、御子方相手に留守を守つて公の歸洛の日を待ち、氣丈夫に家政を齊へ、夫を大事に思つてゐられたことは、更に次に引く菅公の太宰府に於ける詩に躍如として表れてゐる。これも延喜元年冬の作と思はれるが、「家書を讀む。」と題していはく、

便風

米鹽の代

(一)公の屋敷址を後世天神御所といふ。

「消息寂寥たり三月餘、　便風吹着く一封の書。」

三月餘も都の便が絶えて、甚だ寂しく感じたが、けふはいかなる吉日ぞ、東の風がわが家の手紙を吹きつけて來た、うれしいことである。

「西門の樹は人に移し去られ。」

これから以下の四句は、夫人の送られた手紙の内容を詠まれたものである。右大臣家の表門内であれば、松か梅か立派な樹が植ゑてあつたであらうが、今はそれを人が持つて行つた。多分米鹽の代に賣つたか、取られたかしたのであらう。

「北地の園は客を寄居せしむ。」

(一)天神御所の北地といへば紅梅殿であらう。客を寄居せしむ

とあるから、こちらの方は借家か下宿に出されたものと見える。庭木の賣食に下宿業。これがきのふまで右大臣として帝の寵遇斜ならなかつた菅公の夫人の生計の有樣である。太宰府の菅公はどんな心持でこの手紙を讀まれたであらうか。

寵遇

「紙に生薑をつゝんで藥種と稱し。

草根木皮配煎

昔の草根木皮の藥には、生薑の配煎が必要とされたのであるから、いはば生薑は家庭衛生の必要品である。「たまに生薑が手に入りましたから、不時の用にと紙に包んで貯藏して置きました。」困難の中でも一物もいやしくもせられぬ夫人の用意のほどが知られる。

いやしくもせず

「竹に昆布を籠めて齋儲と記す。」

總菜

內の御祭の御供物も十分には辨じかねる境遇である珍しく昆布をもらつたからとて、御子方の總菜にもされずに、直ちに竹筒に入れて、御祭の時の神饌の用にしまはれたといふのである。

神饌

以上の四句は、千言萬句よりも明らかに、京地に殘された菅公一家の生活狀態を菅公の筆で表してゐる。なんたる悲慘な境遇であらうか。その反面には、夫人が凛乎たる決心を以て、百難を排して生計の方法を講じ、缺乏の中に祭事を大事にし、藥餌のはてまでも注意して居られる、誠に行屆いた齊家の有樣が、ありありと見えるではないか。

千言萬句

反面凛乎百難を排す

藥餌

齊家

懊惱

「妻子飢寒の苦みをいはず。これ還つて余を懊惱せしむるを愁ふるが爲なり。」

留守宅の現狀は前の如くであるが、それをたゞその通りの事實として報じただけで、その餘は、徒に夫を心配させまいとてか、自分や子供の飢寒にせめられて困つてゐる愚痴は一言もいうては來ぬ。いはないどころか、御留守はとにかくどうにかやつてゐますと、却つて安心を求めてくる雄々しさは、なかなか並々の婦人でできることではない。榮華これ事とした當時の婦人社會では、指を屈すべき第一人であつたであらう。實に菅公の夫人たるに耻ぢない人といへようと思ふ。

愚痴

指を屈す

一二　鐘聲

落合直文

西の都のある寺に詣でしに、小法師のころもの袖をうしろのかたに結びかけて、鐘撞きゐたるを見たり。それよりはいづこの鐘きゝても、そのさまの思ひいだされて、一入あはれを覺ゆることとなりぬ。その後、東の都のある寺にて、印半纏とかいふもの着たる下衆男の脛もあらはなるが撞きゐたるを見たり。それよりはまたいづこの鐘きゝても、そのさま思ひいだされて、更にあはれも覺えずなりぬ。ひとしく無常を告ぐる鐘の聲なり。されど西の都の鐘の響ならでは、わが涙は出づべくもあらずとなん。

——萩の家遺稿——

一三　日光より

徳富健次郎

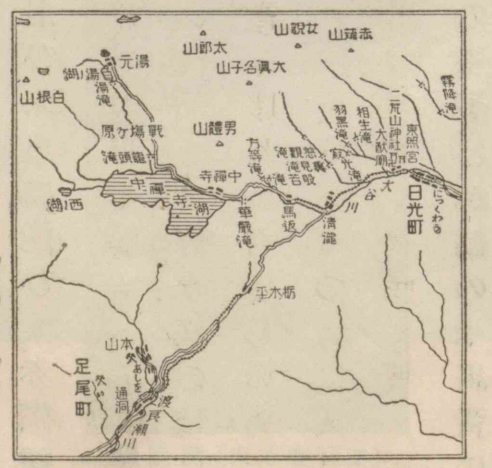
去二十六日午前十一時、上野發の列車にて小春の田舍三十里を瞥見しつゝ、點燈頃日光(一)に着き、翌日中禪寺へ向かひ候。その間三里、半途の清瀧までは、いはゆる山舒水緩の境にて、他の奇なく候。清瀧より足尾街道と岐れて右折し、始めて山間に分入り、馬返の山村を過ぐれば、道は高峰の間に入りて、頭上の青天巾よりも狹く、大谷川雷の如く脚底に吼え候。

これより中禪寺湖に到るまでの一里は、錦繡の山に候。楓、漆、山柿、栗、かば、櫻等燃えに燃えて、黄焔紅火、眼もあやに候。松、檜、もみなどの緑の、ちらほら入交りたるも、一入の眺に候。巖

瞥見す
(一)栃木縣上都賀郡の町。二荒山の麓。
山舒水緩
(樺)

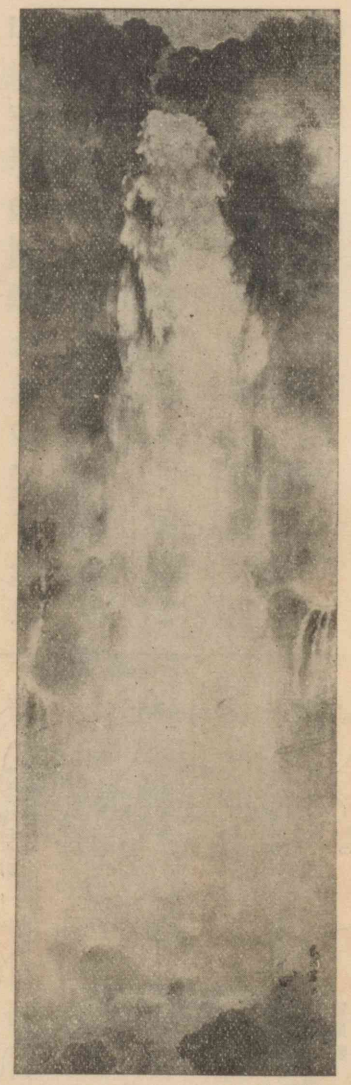
より巖に渡す獨木橋を、岩魚釣る男がびく提げて行くも、そのまゝ畫に候。道は山色水聲の間を通じて、一歩一歩仰ぎ上り候。ふと頭を上ぐれば、夕陽火の如く左岸の諸峰を炙つて、半峰以上は赫として燃えんとするに、右岸の諸峰は落暉に背いて薄紫に闇み、ありとも見えぬ山腹の炭燒小屋より、一條の白煙縷々として立昇るなど、興味饒く候。

華嚴の下流と方等の下流と落合ふ邊にて、金髪碧瞳の西洋婦人が、籐椅子に乘りて來るに逢ひ候。その後より、夫なる

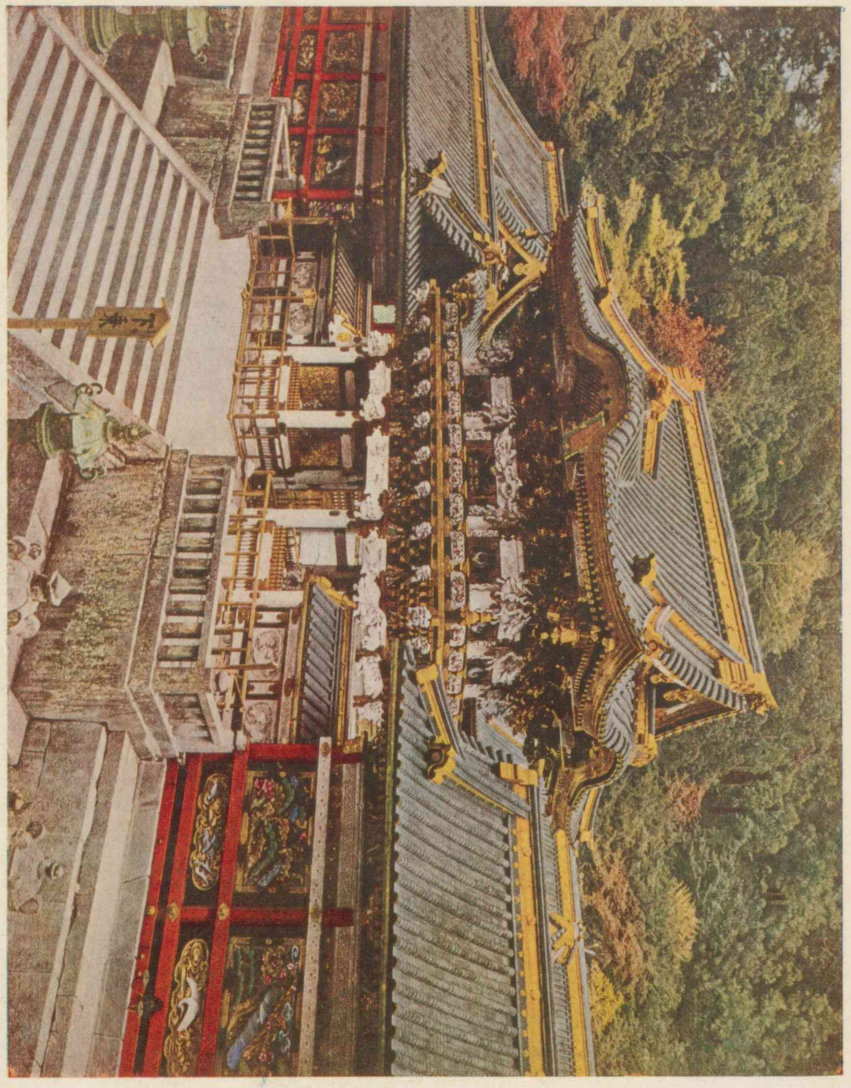


(魚籃)
落暉
白煙縷々
金髪碧瞳

べし、立派なる西洋紳士が、太き栗毛の馬に乘りて來り候。更に上るほどに、一曲の俚歌頭上に起りて、坂を曲れば、歌の主なる十二三の小娘が、炭負へる馬追ひ來るに逢ひ候。赤襟襦袢に白手拭を被り、草鞋、股引、手甲の姿かひがひしく、馬背に一枝の紅葉を挿したるなど、畫にも歌にもしたき風流に候。方等の瀧見茶屋を過ぎては何人にも逢はず、寂しきこと



華嚴瀧（山本春汀筆）



明陽門

に候。木の間越しに光りし夕日の山は薄れ行きて、夕霧谷間よりはひ上り、日暮れかゝり候。何處ともなく響く瀧の音、わが踏む落葉の音の外には何もなく、秋山の黄昏身にしみて覺え候。詩など吟じつゝ行くうちに、羊腸の坂盡き、疎林開けて、一面の明鏡白く夕闇に光り候。中禪寺湖にて候ひき。

中禪寺湖

當夜は湖畔の宿に水聲を聞きて眠り、その翌日、山を下りて日光祠に賽し候。何やら滿腹

賽す

の後に甘煮をふるまはれたる心地にて、匆々に看過いたし候。不具。

—青蘆集—

一四　枯林

吉江喬松

寂しいものの極みのやうにいはれてゐる冬枯の林の中、或夕方自分はその中へさまよひ入つた。一度は葉守の神の宮居とも思はれ、百鳥の啼交す紅葉の樂園とも榮えてゐた林の、今はもう葉といふ葉が悉く落ちつくして、いかなる小枝の端の端までも、その跡をとめて見ることができ、かばの樹、はんの樹、えのき、栗などの幹もあらはに骨のやうになつて、いかにも寒げに立つてゐる。

葉守の神

（榛）
（椴）

林の中は寂然として、落葉を踏んで行く自分の足音の、次第にこめてくる四邊の夕もやの中に消えて行くばかり、外にはなんの響もない。自分はとあるはんの樹の幹によつて、凝然と枝の端から上の方を見上げた。空にはまだほんのりと明るく雲の浮いてゐるのも見える。よく春の夕方などに輪をなして樹間に飛んでゐる小さい羽蟲の群も見えず、秋の暮方晩く啼きながらねぐらに歸つて行く山しぎの聲も聞えない。たゞ樹間を透して、日沒後の餘光が微かに横雲の灰色したのを下から照らして、低い山の頂と雲との間に細長い深紅色を留めてゐるのが見えるばかり。その雲間を遠く眺めたり、その紅の次第に黑くなつて行くのを見つめて

（塒）
横雲

ゐると、我知らず涙がまぶたに溢れてくる。この時の寂しい懷かしい思は、何に譬へようか。

この頃はもう嵐もたびたびは起らない。野を吹き、森を拂ひ、山を越えて、爲すべき任務をば爲しはてたのか、たゞ雪を含んだ雲をば、野末に遠く地平線の上を、かなたこなたに追ひやつてゐるばかり、隨つて夕嵐の林を襲つてくることもなく、闇の色の林の奥から次第に濃くなつてくるにつれ、寂莫が四邊を領してくる。

ふと氣がついて見ると、かばの樹の高い小枝に一片の葉がついてゐる。風のありとも思はれないのに、ひらひらと廻つてゐる。周圍が寂として音もなく動かないのに、この葉の

五體の緊縮

霜をれ

みが微かに聲立てて躍つてゐるさまがいかにも不思議で、何か目に見えないものがその葉の蔭に來て、それをば吹鳴らしてゐるのではあるまいかと思ふと、不意に怖しいものの力が身に迫るやうな氣がして、五體の緊縮するのを覺えるが、やがてその葉の搖ぎも靜まつて、枯林の中は眞暗になつてしまふ。自分はなほ動かうともせず、闇の中に立ちつくしてゐた。

或朝のこと、普通には霜をれがしたといはれるうら寒い曇つた日に、江戸川堤の上をさまよつた。霜が白く刈田の上に置き、堤の枯草の葉にも凍つて、掃集められるくらゐにも見えてゐるが、いつも霜の朝には見る華やかな麗しい日光

の、けさは隱れて、灰色の雲が濃く、雀の啼聲も、をりをりどこからか、じいじいと寒げに聞えてくるばかり、寒さは肌に浸みて、すべての景色が、なんとなく頭の垂れるのを覺えしめる。ふとこの時頭上でからからと鳴る音を聞いた。見あげると、堤の上に立並ぶさいかちの樹の梢に、莢と莢とが相觸れて音を立てるのであつた。またからからと鳴る。その寂しい響、思はず立止つて傾聽せずにはゐられない。下にはありとも思はれない風の、梢高く來て觸れるのか、それとも莢の中なるさいかちの實の、おのづと搖いで發するのであるか。自然の物音の中で、これほど寂しい思をさせるものはない。靜かな日に林の中でおのづと落ちる松かさの響や、夜更けて

（皂莢）

傾聽す

後庭つゞきの柴山に、ぽつぽつと落ちる栗の實の音、いづれも靜寂の感に堪へざらしめるが、霜枯のした川沿堤、さいかちの實のからからと鳴るのを聞くほど、寂しいものはない。じつと眼を閉ぢて聽いてゐると、その響が胸に浸みこみ、身はさながら靜寂の中へ消えさつてしまふかのやうに思つてゐると、舊時のことや、故郷のことなどが胸に浮かんでくる。

をりふし墓塲などへ行つて見ると、四邊の靜寂な中で、墓標の榊の葉のみが、獨りさらさらと音を立ててゐることがある。周圍が寂しいだけ、それだけその物音は不思議な感を起させる。さいかちの實の鳴るのも同樣で、寂しさの中心は、

その物音に繫がれてゐるやう、聽くものの身も心もその物音に引きこまれ、われ孤獨といふやうな感が、ひしひしと胸に迫つてくる。

いくらか云々　地面のありさまを人にみたてていふ。

自修文

一五　雪と霰

薄田泣菫

朝から曇つた空が、午過になつて少し明るくなつたと思ふと、日光がちらちらと笑ひだしました。何よりも日光の好きな私は、それを見るとたまらなくなつて、外套も着ないで、いきなり外へ出かけました。

菜つ葉といふ菜つ葉をすつかり引つこぬかれてしまつた野菜畑は、その跡を百姓の手で綺麗に耕されて、いくらか疲れたらしい細かなざらざらした肌に、日光と寒さとを腹一杯吸ひこみ

作物　製作したもの。多く小説、戯曲、詩、繪畫、彫刻など。

（孕）

創作家　小説家、戯曲家、詩人など。

觸手　下等動物がものをさとるに用ひるもので、人間の手のやうなもの。

產毛　うまれた時からはえてゐる毛。

ながら、靜かに次の日の種子蒔を待つてゐます。私はそれを見ると、一つの作物を骨を折つて書上げたその疲が、まだすつかりとれきれないのに、もう次の作物をはらまうとしてゐる創作家の心の饒けさと悲しさとを、思はずにはゐられませんでした。

私は葉の落ちつくした一本のくぬぎの幹によりかゝりました。日光がふるへながら私の羽織の上をはつてゐるのが、はつきりと背に感じられました。私は冬から春先へかけての日光が好きです。光が蟲のやうに鋭敏な觸手をもつてゐるのが感じられるのもこの頃です。光が燒パンのやうなこんがりした匂をもつてゐるのが感じられるのもこの頃です。光が少女の首筋のやうに細かい產毛をもつてゐるのが感じられるのもこの頃です。さうした感じは、太陽そのものが、足の裏の柔かい生物ででもあるかのやうな親みを抱かせます。私は背を樹にもたせかけたまゝ、

細心　注意ぶかい心。
頓着　氣にかけること。

この生物のやうな日光のするがまゝに身體をまかせて、ぼんやりしてゐました。

急に首筋が寒くなつたので氣がつくと、太陽はいつのまにか隱れてしまつて、曇つた空からは、細かい粉雪がちらちらと落ちて來ました。

「また雪か。」

私は口の中でつぶやきながら、急いでそこを立去らうとして、すぐ目の前に不思議なものを見つけたので、またもとのやうに、身體を樹の幹にもたせかけました。それは外でもない、野菜畑の中にあるはねつるべのてつぺんに、一羽の小鳥が止つてゐて、雪の降る空をじつと見上げてゐる、その眼つきです。鳥はふだんの臆病と細心とに似合はず、すぐ近くに私が立つてゐるのに氣がつかず、氣がついても、そんなことには頓着(こんちやく)してゐられないといつた風に、一心になつて、じつと雪の降る空の深みを見入つてゐます。

表情　心持が顏や身ぶりにあらはれたさま。

「何をあんなに見入つてゐるのだらう。」

私はそれを考へずにはゐられませんでした。喜といふでもなければ、小鳥によく見る悲しい表情でもありません。

「ことによつたら、小鳥め、生まれて始めて冬を越すので、雪の降るのが不思議でたまらないのぢやなからうか。」

私はそんなことを思つて見ました。

霰が降りだしました。

一つ一つ空から投げつけられたやうに飛んで來て、屋根にぶつかり、二つ三つとんぼがへりをして、勢よく植込のなかへ轉がり落ちて行く容子は、子供の時と同じやうに、今もおもしろいと

明障子　普通のしやうじのこと。
(一)足利第一代の將軍。室町に幕府を開いた。
北山殿　金閣のこと。
對屋造　中央に母屋があつて、それから東西へ建てだした家。
清涼殿　昔天皇が政をとられた御殿。
孫庇　母屋のひさしにそへたひさし。
趣向　しくみ。

思ひますが、霰のほんたうな興味は、明障子をたてきつて、薄暗い一室に閉籠りながら、軒の板庇にはらつくその音に、はつと聞耳を立てるところにあるやうです。

昔(一)足利義滿の北山殿は對屋造でしたが、軒が狹いといふので、庇の外にまた庇をかけさせたことがありました。すると義滿はそれを見て、

「ちやうど清涼殿にゐるやうな氣持ぢや。この冬が待たれる。」

といつて、ほくそ笑んださうです。清涼殿には檜皮ぶきの庇の外に、孫庇として今一つの板庇が添へてありました。秋から冬にかけて時雨が降る頃になつても、檜皮ぶきだと雨がそのまゝそつと音もなくしみこみますが、板庇だと時雨の音が聞かれるので、それを味はふ爲の趣向だと言傳へられてゐます。

私の鄕里の家は、見る影もない小家ですが、それでも祖父も父もが風雅の心があつただけに、家の内が暗くなるのをも厭はないで、軒にはわざわざ板造の孫庇をかけてゐました。冬が來て、冷たい時雨がはらつく頃になると、この板庇はひどく敏感で、薄暗い部屋のなかで火燵にもぐつてゐる私たちの耳に、心に、いち早く雨の音を傳へたものでした。

小石をたゝきつけるやうな甲高な、氣ぜはしい霰の音を板庇で聽くのは、少し騷々し過ぎて、冬の靜かな境地を、いくらか脅かされるやうな氣持がしないこともありまんが、しかし、それもまた興味のあるものです。

(一)靜岡縣駿河國志太郡。大井川の東岸。

一六　冬枯の大井川

千葉龜雄

東海道島田(一)の驛はここに盡きた。「この川一つを向ふへ渡

れば、そこがすぐ金谷の町だ。」といふ。今、大井川の冬枯の堤に立つ。

飽くまではしやぎきつた初冬の空は、底も知れぬほどに凝つて蒼く、見るも寒げに、高く高く澄んでゐる。白い雲が、時時ぽつちり浮かんでは、また一たまりもなく吹流される。風のないだ大海に、白い帆影が現れては、またすべつて行くとも思はれる。日影は小春日のやうに暖かいが、風は飽くまで冷たく、骨を刺す。岸の川柳の葉が半ば枯れて、ほろほろと水にこぼれる。肩をすぼめて、俯向いて泣いてゐるのではあるまいか。名も知らぬ小鳥が、矢のやうにひよいひよいと飛んで出ては、つんざくやうな細い聲で、ひいひいと啼いて行く。

(一)静岡縣遠江國榛原郡。大井川の西岸。
(二)甲斐の白根山に發し、駿河、遠江の國境をなして海に入る。長さ四十六里。

はしやぐ

「冬が來た。宿がなくなつた。」と泣くのかも知れぬ。名にし負ふ天龍、富士と押並んで、東海道隨一の大河と呼ばれたこの大井川も、今は瀬が涸れ、水が落ちて、廣さ何町といふ石ばかりの河原が、一面のセピヤ色に眼前に展開されてゐる。見わたす河上も河下も皆川原である。石といつても、幾百年となく激流に洗はれて、握飯のやうに圓くなつて、灰色に晒されたごろた石だ。その灰茶色な石原の中を、幾つにも割つてちろちろと白く動くのは、大井川の流であらう。白い流水は、日光を浴びて青く緑に閃き、小石を嚙み、大石を嚙んで、瀬枕立てて、滔々と流れて行く。小鳥の時たまに啼く聲が、他界からでもくるやうに響く外には、河の両岸のこの眞晝を、寂として

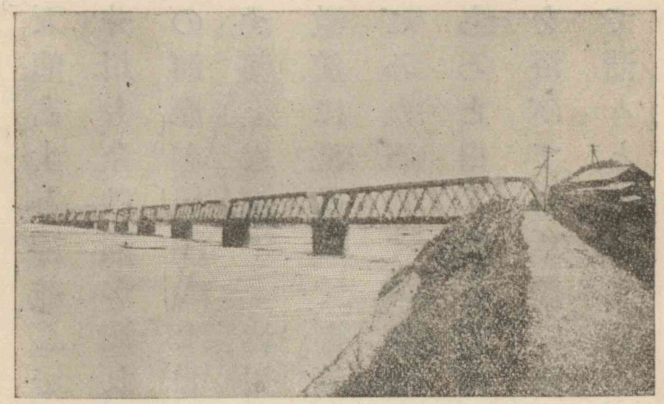
(一)長野縣諏訪湖に發し、遠江に入つて海に注ぐ。長さ五十六里。
(二)甲斐國に發し、身延山の麓を過ぎ、駿河に入つて海に注ぐ。

名にし負ふ

隨一
(三)Sepia.

瀬枕立つ

鍛冶屋の鎚音一つ響かない。若し夢に容があらば、この靜寂が即ち夢の容であらう。若し夢に聲があらば、この流の聲が即ち夢の聲であらう。水は滔々として、百年二百年の夢を見て、夢のやうに流れてゐる。岸に立つ人また恍として、いつしか二百年三百年の昔の夢を繰返さざるを得ない。



今の大井川

「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。」

どことなく長閑な馬の鈴が、ちやらん、ちやらんと鳴つて、

空にも入れよ、地にも徹れよと、清しい馬子唄の聲が夢に入る。あゝ、富士といはず、天龍といはず、一葉の船、一本の棹で越されぬ河流がどこにあらうか。獨り大井川だけが、船で越すことを許されなかつた。徳川幕府が江戸に移つて、始めて關東を經營すると共に、大井川を東海一の要害と見た。若し船で上流に溯り、下つてこの河の形勢を見極めるものがあれば、天下の守は悉くこれから破れる。乃ち令して川越を行はせたと、土地の歴史に精

昔の大井川（廣重筆）

しい人は說く。

かくて裸一貫の荒くれものは、川越人足の名をもつて、東海道唯一の名物となつた。さしも鬼を取挫ぐ剛情武士も、その背に負はれては、ぐうの音も出ず、島田、金谷の全盛目を驚かしたのも、今は昔だ。汽車で通つてしまふ今日では、寢てこそ渡れ大井川。その大井川の冬枯の岸に、今初冬の日光を滿身に浴びて立てば、盡きせぬ流の聲も、無意味に聞くことはできぬ。石に碎けて咽せぶのは、「昔の全盛を聞け。」と語るのではないか。今の寂しさに泣いてゐるのではないか。自分はゆふべ日が暮れて島田の驛に降りた。降りる人は僅かに一人二人。狹いプラットホームを潛つて驛を出ても、人力車一つ

あるではない。風が海のやうに吼えてゐた。寂然として眠つた山々の影が、くつきりとくぎつた空線の上に、滿天の星の光がさえて、ぶるぶると震へてゐた。舊式な懸行燈の火影をたよりに、鞄を抱へて、舊驛の一夜の宿を探した自分は、今更に島田の宿の衰頽を泣かざるを得なかつた。

衰頽

一七　夕もやの野

中西悟堂

野にはもう夕もやが流れ始めた。
あちこちの枯木立の梢は夕日の殘光に染められ、
靜けさと平和とに領せられた麥畑には、
黙つて農夫が働いてゐる。
その敬虔な勞動の姿よ。

（笊）

時々鍬が白く光るが、
もやはもう彼等を包みながら、
青麥の上を生きもののやうにはひまはる。

畑の路を
ざるをかゝへた娘が、
家路の方へと歸つて行く。
ざるに盛られた野菜の新鮮な綠、
そして頰被の下に見える娘の顏の
單純な健康な笑よ。
娘は畑をぬけて、
木立の道を夕餉の煙吐く垣根の方へ
はだしのまゝ急いで行く。

神の言葉に充ちた平和な野よ。
ここには愛とゆるしの外の何物もない。
地平線には墨繪のやうな富士が風に吹かれてゐて、
その上に夕べの星が出現した。
農夫たちがそれにむかつて一日の恙ない勞動を感
謝し、
明日の幸福を祈るところの慈悲ある星が出現した。

一八　甲冑堂

奥州白石(一)の城下より一里半南に、齋川といふ驛あり。この齋川の町末に、高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作

(一)福島縣刈田郡。今は白石町。

狐梟のすみか

に、この寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も住まず空寺となり、本尊だに何方へ取納めしにや、寺には見えず。庭に草深く、誠に狐、梟のすみかといふも餘りあり。この寺にまた一つの小堂あり、俗に甲冑堂といふ。堂の書付には故將堂とあり。大いさ僅かに二間四方許の小堂なり。本尊だに右の如くなれば、この小堂の破損はいふまでもなし。やうやうに緣にあがり見るに、内に佛とても なく、たゞ婦人の甲冑して長刀を持ちたる木像二つを安置せり。いかなる人の像にかと尋ぬるに、佐藤繼信、忠信の妻なりとかや。

これ今より百餘年前、(一)橘南谿が東遊記に記せるところな

(一)醫者兼文學者。文化二年(一四六五年)歿。

形見ばかり歸る

り。

繼信、忠信は源義經の家來なり。平家の盛なりし頃、義經は奥州に下りて身を藤原秀衡に寄せしが、兄頼朝の兵を擧ぐる由聞きて、急ぎて鎌倉へ馳參じぬ。繼信兄弟も從ひ行きしに、その後義經京都へ攻上り、平家を追落して武功著しかりしかども、頼朝と不和になりて、再び奥州さして落延びたり。然るに、繼信は屋島の合戰に能登守教經の矢に中りて斃れ、忠信も京都にて討たれしかば、同じく從ひ出でたりし龜井、片岡等の人々は無事にて歸國せしに、繼信兄弟は形見ばかり歸りぬ。母は悲みに堪へず、せめて二人の中の一人にても歸りたらばと、悲歎の涙やむ時なし。兄弟の妻は母の心根を

痛手

今はの一言

察し、やがて夫の甲冑を取出し、勇ましげにいでたちて、母の前に跪き、「兄弟たゞ今凱陣いたし候ひぬ。」といひしかば、母も二人の嫁の志を喜びて、涙ををさめてほゝ笑みたりとぞ。

繼信の主と賴みし義經に忠なりしは、屋島の戰に敎經の矢面に立ちて、主の命に代りしにても知るべし。義經は痛手を負へる繼信をいたはりて、「ひと所にとてこそ契りしに、先立つることの悲しさよ。思ひ置くことあらばいへかし。」といへば、繼信苦しげなる息の下に、「敵の矢に中りて主君の命に代るは、弓矢取る身の習、更に恨にあらず。たゞ思ふところは、故郷に遺し置きし老母の身の上なり。弟なる忠信をば行末かけて召使ひ給へ。」とばかりいひて、やがて息絶えたり。今は

の一言に母への孝心、弟への友愛、これを聞ける兵も皆鎧の袖を絞りぬ。弟の忠信が吉野の山に踏止りて、多勢の敵と戰ひ、義經を落しやりし武勇義烈は、兄にも劣らずといふべし。

妻なる二人の婦人が、深き悲みを押包みて、母を慰めんとせし健げさ、雄々しさ、うちそろひての忠孝、世にもめでたき例ならずや。時の人のその姿を木像に刻みて、この堂を建てしも、故あるかな。ここに詣でし俳人の句に、

(一)いくさめく二人の嫁や花あやめ

(二)卯の花やをどし毛ゆゝし女武者

明治八年この小堂火災に罹り、像も共に燒失せたりとぞ。

——高等小學讀本——

(一)桃隣の句。

(二)小華山人の句。

(一) Corsica. 地中海中の一島。フランス領。

震撼す

精神的英雄

(二) Beethoven. (西暦一七七〇年―一八二七年)

(三) Victor Marie Hugo. (西暦一八〇二年―一八八五年)

一九　ベートーベン

十八世紀の末に於て、ヨーロッパは一人の大英雄を産みだしました。コルシカ(一)の一孤島から現れて、フランス革命の風雲に乘じ、遂には皇帝の位に登り、全ヨーロッパを震撼せしめたナポレオンの名は、よし西洋史を繙かない人でも、知らないものはないでせう。けれども皆さんは、これと時代を同じうして、恐らくはナポレオンより更に偉大な精神的英雄がドイツに現れたことを、忘れてはなりません。英雄とは即ち(二)ベートーベンその人であります。

誰かがフランスの文豪(三)ビクトル・ユーゴーと、その傑作『哀史』とについて、次のやうなことをいつたと覺えてゐます。いはく、「ナポレオンの名が人々の記憶から失はれてしまつても、ユーゴーの名が忘れられることはないであらう。千載の後には、人々が『哀史』を繙いて、『この頃フランスにナポレオンといふ皇帝があつたさうだ。』といふやうになるに違ひない。」と。同じやうなことは、ベートーベンとナポレオンとについても、いふことができるでせう。今日では、ベートーベンの「英雄シンフォニー」(一)が、ナポレオンに捧げらるべきはずであつたといふ意味で、特に有名になつて

ベートーベン

(一) Symphony. (交響樂)

ねますが、やがてはナポレオンの名が、「英雄シンフォニー」と結びつけられることによつてのみ、音樂の好きな人の頭のなかに浮かんでくるやうになるに違ひありません。

通俗的英雄知己を千載の後に待つ

藝術家の仕事といふものは、はでなやうに見えて、その實、將軍や政治家などの通俗的英雄のそれのやうに、華やかなものではありません。知己を千載の後に待つといふ言葉の通り、彼等は自分の存命中に酬いられるところは少いのでした。勿論ベートーベンの藝術は、ベートーベンの生きてゐる間にも、認められてゐたには相違ありませんが、しかし、それは果してベートーベンの酬いらるべきすべてに値したでせうか。恐らくベートーベンの時代に於て、彼の偉大さを

ナポレオンに比較し、またその一篇のシンフォニーを、ナポレオンのヨーロッパ征服や、法典の制定にもまして有意義であると申しましたならば、人々はそれを狂者の言としかしなかつたでせう。しかし、今日冷靜に考へて見ますと、ナポレオンの遺した事業よりは、ベートーベンの遺した作品の方が、遙かに人類の精神生活に貢獻するところが、多大であると申さねばなりません。なるほど一人のナポレオンが存在しなかつたならば、今日の世界地圖、少くともヨーロッパ地圖は、或は色彩を異にしてゐたかも知れません。けれども、地圖の上の色彩がいかやうであつても、人類の思潮は、當然進むべき所に進みつゝあるでせう。しかし、若し一人のベー

トーベンがなかつたなら、あのやうな雄大なシンフォニーは、永久に現れなかつたに違ひありません。「命は短く、藝術は永し。」といひますが、ナポレオンが忘れられても、ベートーベンは永久に生きるでせう。

——前田三男の文による——

二〇　月光の曲

音樂家としてのベートーベンは、ドイツでは子供でもその名を知らないものはない。ベートーベンは一千七百七十年にライン河に沿うたボン[一]といふ町に生まれて、一千八百二十七年にオーストリヤの首府ウィーン[二]で死んだ人である。[三]

まだボンにゐた時のことであつた。もの凄いほど月のさえきつた冬の夜、友人と共に散歩して、細い小路を通りかゝつた時、俄

〔一〕Bonn.
〔二〕Austria.（墺太利）
〔三〕Vienna.（維也納）

に足を止めて、「あれは僕の作つた曲だ。いかにも上手に彈いてゐる。」と獨言のやうにいつた。それは小さい賤しげな家の前であつた。二人は戸外にたゝずんで、暫く聽いてゐたが、やがてピアノの音がはたと止んだ。「私にはもうとても彈けません。なんといふ美しい曲でせう。一度ケルン[一]の演奏會へ行つて見たい。」と情ないやうにいつてゐるのは、若い女の聲である。「家賃さへ拂へない今の身の上で、どうしてそれができよう。」といふのは男の聲である。

ベートーベンはやをら戸をあけて、その家にはいつた。薄暗い燈火の下で、青ざめた元氣のなささうな若い男が靴を縫つてゐる。その傍に、ゆたかな髪の毛を額に漂はせて、一人の娘が古いピアノの前に坐つてゐる。知らない人が不意にはいつて來たので、二人は驚いた樣子。

「御めん下さい。私は音樂者ですが、餘りのおもしろさに、つい釣

たゝずむ　たちどまる。
はたと　ぱつたりと。
〔一〕Koeln.
やをら　しづかに。

一曲　ひとふし。
體　やうす。
樂譜　音樂の譜。調子を符號で記したもの。
面相　かほつき。
異樣　かはつたふう。
とみに　急に。にはかに。
乘移る　何かの靈がその身にやどる。人間わざとはいふ。見えないのでいふ。
神に入る　ふしぎにすぐれてゐて神わざのやうである。

りこまれて參りました。私にも一曲彈かせて下さい。」とベートーベンがいつた。娘の顏は紅に染まつた。青年はむつつりとして、困つた體である。「有難うございますが、私どものピアノは誠に粗末で、それに樂譜もございません。」と男がいふ。

ベートーベンは「樂譜がない。それでどうして。」といひさして、見ればかはいさうに、娘は盲である。

「これで澤山です。」といひながら、ベートーベンはピアノの前に腰を掛けて、すぐに彈きはじめた。その最初の一音が、すでにその兄弟の耳には不思議に響いた。ベートーベンの面相は見る見る變つた。両眼は異樣に輝いて、彼の身にはとみに何物か乘移つたやうに見える。一音は一音より妙を加へ神に入つて、ベートーベンはすでに何を彈いてゐるか覺えないやうである。兄弟はうつとりして、ひたすら感に打たれてゐる。兄は手に持つた靴を取落

（躍）　我を忘る　聽きとれてぼんやりする。
奏づ　ひく。
うなだれる　くびをたれる。

して、驚きの目を見張つたきり、妹は少し頭を前に傾け、両手をしかと胸に押當てて、その心臟の響が、この美しい音を少しでも亂さぬやうにと、ピアノの傍にうづくまつてゐる。ベートーベンの友人も全く我を忘れて、一同夢に夢見る心地である。

月光の曲

蠟燭の火が俄に消えた。友人は起つて窓の戸をあけると、青い月の光は、ピアノと、ピアノを奏でる人の顏とを照らした。ベートーベンは彈く手を止めて、首をうなだれて、沈思の體である。暫くして兄は恐る恐る近寄つて、熱心な、しかも低い聲でいつた。「あなたはどうした御方です。」

月影隈なく　月に少しの雲もなく一面に照つてゐるのをいふ。

舞踏曲　舞踏する時に用ひる歌のふし。

妖精　ばけもの。

（閃）

奔流云々　勢よく流れる水が巖におそろしい高浪が岸かり、に當つて、碎けるやうに、變化して行くおもしろみを十分盡してゐる。

萬感交、至る　いろいろな思がかはるがはる胸にせまる。

茫然として自失す　ぼんやりして氣ぬけがする。

「まあ御聽き下さい。」と制して、ベートーベンはまた彈きはじめた。「嗚呼、あなたはベートーベン先生ですか。」と、兄妹は思はず叫んだ。

月は益、さえわたつた。「この月の光を題に一曲を。」といつて、ベートーベンは暫く月影隈なく、星まばらな大空を眺めてゐたが、やをら指はピアノに觸れたかと思ふと、優しい沈んだ調は、恰も東の山の端に昇つた月が、次第次第に闇の世界を照らすが如く、靜かに、柔かに響き始めた。次いでくる奇怪な舞踏曲のもの凄さ。妖精の夜出て庭の芝生に狂ふ如く、最後の快速な調は飛ぶが如く、ひらめくが如く、奔流巖に激し、怒濤岸を嚙み、つぶさに變幻の妙を極めた。三人はたゞ悲しみ、喜び、驚き、恐れ、萬感交、至つて、遂に茫然として自失してしまつた。

彈き終るとベートーベンは、今の曲を忘れないうちに譜にしたいからといつて、走るやうにして歸つたが、その夜は机に向かつて、遂に夜を徹したのであつた。これがベートーベンの月光の曲といつて、不朽な名聲を博した曲である。——高等小學讀本——

徹す　あかす。

マルセーエイズ曲（La Marseillaise）　「いざ行け祖國の光榮の日ぞ來る。子等血にの染める虐主の旗は吾等に向かつて翻れ。野に屍を晒し、武器を作り、民を進め、鮮血を浸さはめ、市に暴れ、兵を集め、荒屋を焼き、田を荒し、子を殺し、婦を辱し、わが畑を踏み、わが哇を吼えんとす。」

二一　國歌の話

一國の音樂が、どれほどその國の人情に左右されるかといふことは、國歌などを見ると最もよくわかる。實に國歌の比較は、一面には國々の國體を比較することにもなり、またその國民の氣風性質などを知る便ともなる。今試みに西洋の三大音樂國といはれてゐるイタリー、フランス、ドイツ三國について、その國歌を較べて見よう。

最初まづフランスの國歌マルセーエイズ曲について考

貴族的好尚

へて見ると、これには貴族的好尚に對する反抗が表れてゐて、甚だしく平民的傾向を帶びてゐる。隨つて國歌の上に尊嚴といふものがない。そのかはり、感情は實に遺憾なく表れてゐる。一體感情を極端に表すといふことが、フランス音樂の一つの特徴となつてゐるのであるが、この國歌には、殊にこれが著しい。この意味でマルセーエイズ曲は、眞にフランス人民を代表する國歌として、ふさはしいものである。

剽悍勇猛

理性

次にドイツの國歌を見ると、これは全くフランスの反對である。ドイツ國民は頗る剽悍勇猛であると同時に、また理性が明らかで、徒に感情に走らない。隨つて感情中心のフランス音樂などとは大いに違つてゐる。この國には古來愛國

的歌謠が頗る多いが、その愛國心といふのが、またわが國や、イギリス、(一)ロシヤなどと甚だ違つてゐる。わが國は全然皇室中心主義であつて、愛國といふことは、即ち皇室を尊重することである。然るにドイツの愛國は、自國が他國に對して戰勝を得ることを喜ぶといふだけの思想から起つた愛國心である。隨つて國歌は皇室尊崇などよりは、他國に對する威壓を以て第一の目的としてゐるのである。この點がドイツ國歌の特徴である。それは準國歌たる「ラインの守」及び同じく準國歌たる「ドイツ人の祖國は何處か」を見るとよくわかる。かやうにドイツの國歌とフランスの國歌とを比較すると、ドイツのが威壓的であるのに反して、フランスのは反抗

(一) Russia.（露西亞）

皇室中心主義

「ラインの守」

「聲は雷の如く劍の響と波の音とに交りて聞ゆ。ライン、ライン、ライン國よ、ドイツのこのライン河の守護者は誰ぞ、愛するぜよ、安んぜよ、ライン河の守は立てり、堅固に、かつ忠實に。」

ドイツ人の祖國云々

「ドイツ人の祖國やいづこ。プロシヤか、ヴヤか、はたスワビアか。葡萄實るかのラインのほとぱるかもめの岸かぐ泳ぐチロルか。否、否、否。ドイツの國は更に大なるべし。」

的である。ドイツのが理性的であるのに反して、フランスのは感情的である。實にこの両國の國歌を見ただけで、かの歐洲大戰爭の光景が、目に見えるやうに感ぜられる。

翻つてイタリーはどうであるか。普通イタリーの國歌といへば「ロイヤルマーチ・オヴ・イタリー」(一)と稱せられる軍歌風の進行曲であつて、歌ではない。これはなかなかおもしろく、愉快にできてはゐるが、尊嚴といふ感じは少い。餘り巧に作り過ぎてあつて、國民の眞情が流露してゐない。これは全くこの國の歷史によるのである。イタリーが現今のやうに統一されて帝國となつたのは、今から僅か六十年ほど前であつて、その時から始めて國家といふ觀念が急に勃興し、隨つ

(一) Royal March of Italy.

流露

(二) 西暦一八六一年。

て愛國の歌謠も現れて來た。國歌のロイヤルマーチはこの時に生じたのである。けれども元來永い間の精神修養によつてできた愛國心ではなくて、歷史上の變動の爲に急に現れて來たものであるから、どうも國民の眞情が流露してゐない憾がある。かつまたイタリーでは從來音樂が頗る發達して、作曲法の技も進んでゐたものだから、國歌が內容よりも寧ろ形式に流れてしまつて、國歌としては餘りに曲が上手過ぎ、飾り過ぎてゐる。さて日本の國歌はどうであらうか。

「君が代」は宮內省雅樂部の林廣守(一)の作曲で、割合に新しいものであるに係らず、イタリーのとは大いにその性質を異にしてゐて、非常に尊嚴なものである。今日わが國の國旗な

(一) 宮內省雅樂部副長。明治二十九年歿。六十六年。

旋律

雅樂

る旭日の意匠と、國歌なる「君が代」の旋律とは、確かに世界に對して、わが國の威嚴を示す表徵となつてゐるといつてよい。「君が代」の作曲は一度外國人が手を着けたけれども、不成功に終つた。その後、林氏が全然古代の雅樂に則とつて作られたのが現今の「君が代」である。わが國歌が、かゝる宮中の雅樂師、しかもその老輩の手に成つたといふのは、ちよつと異樣であるが、實はそれがわが國の大幸福であつたのである。

林廣守

一體わが國上代の音樂は、眞に大和民族の眞情を流露した音樂である。かの神武天皇御作の久米舞などは、いかにも雄大かつ壯嚴なもので、これを宮中の饗宴に於て拜する外國の使臣は、皆その結構の偉いのに驚嘆するといふことである。かやうに大和民族本來の特性を失はずに、それに最もふさはしい形式の備つた音樂が、いはゆる雅樂である。さうして、これを大體保留して傳へてゐた宮中の雅樂師が、「君が代」を作曲したのであるから、それが大和民族本來の性情を具へてゐて、しかも形式に於て可なり立派なものであるといふのは、當然なことである。

——田邊尙雄の文による——

二二　元日

夏目漱石

雜煮を食べて書齋に引取ると、暫くして三四人來た。いづ

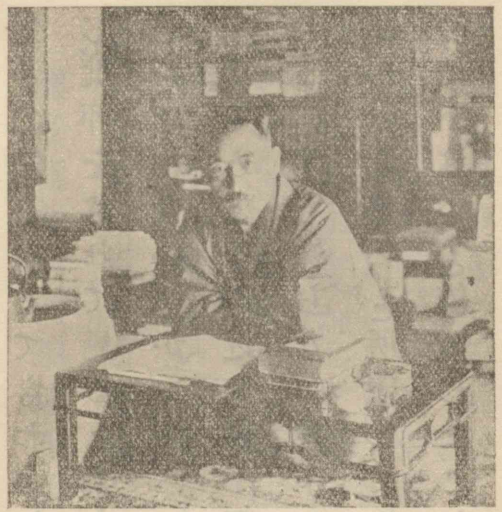
れも若い男である。その中の一人がフロック(一)を着てゐる。着なれないせいか、メルトン(二)に對して妙に遠慮する傾がある。あとのものは皆和服で、かつ不斷着のまゝだから、とんと正月らしくない。この連中がフロックを眺めて「やあ。やあ。」と一つづついつた。みんな驚いた證據である。自分も一番あとで、「やあ。」といつた。

フロックは白い手巾を出して、用もない顔を拭いた。さうして頻りに屠蘇を飲んだ。ほかの連中も大いに膳のものを突つついてゐる。ところへ虚子(三)が車で來た。これは黑い羽織に黑い紋附を着て、極めて舊式にきまつてゐる。「あなたは黑紋附を持つてゐますか。やはり能をやるから、その必要があ

(一) Frockcoat.
(二) Melton.
(三) 高濱清。俳人。愛媛縣松山の人。

るんでせう。」と聞いたら、虚子が「えゝ、さうです。」と答へた。さうして「一つ謠ひませんか。」といひだした。自分は「謠つてもようございます。」と應じた。

それから二人して「東北」を謠つた。よほど以前に習つただけで、殆ど復習といふことをやらないから、ところどころ甚だ曖昧である。その上、我ながらおぼつかない聲が出た。漸く謠つてしまふと、聽いてゐる若い連中が、申し合はせたやうに、自分をまづいといひだした。中にもフロックは「あ



夏目漱石

所望
斬新

なたの聲はひよろひよろしてゐる。」といつた。この連中は、元來謠の「う」の字も心得ないものどもである。だから虚子と自分との優劣は、とてもわからないだらうと思つてゐた。しかし、批評をされて見ると、素人でも理の當然なところだから、已むを得ない。「ばかをいへ。」といふ勇氣も出なかつた。

すると虚子が、近來鼓を習つてゐるといふ話を始めた。謠の「う」の字も知らない連中が、「一つ打つて御覽なさい。是非お聞かせなさい。」と所望してゐる。虚子は自分に、「ぢや、あなた謠つて下さい。」と依賴した。これは囃の何物たるを知らない自分に取つては、迷惑でもあつたが、また斬新といふ興味もあつた。「謠ひませう。」と引受けた。虚子は車夫を走らして、鼓を取

寄せた。鼓がくると、臺所から七輪を持つて來さして、かんかんいふ炭火の上で、鼓の皮をあぶり始めた。みんな驚いて見てゐる。自分もこの猛烈なあぶり方には驚いた。「大丈夫ですか。」と尋ねたら、「えゝ、大丈夫です。」と答へながら、指の先で張切つた皮の上を、「かん」と彈いた。ちよつと好い音がした。「もういいでせう。」と七輪から卸して、鼓の緒を締めにかゝつた。紋服の男が赤い緒をいぢくつてゐるところが、なんとなく品がよい。今度はみんな感心して見てゐる。

虚子はやがて羽織を脱いだ。さうして、鼓を抱へこんだ。自分は「すこし待つてくれ。」と賴んだ。第一、彼がどこいらで鼓を打つか、見當がつかないから、ちよつと打合せをしたい。虚子

は、ここで掛聲をいくつ掛けて、ここで皷をどう打つから、おやりなさいと、懇に說明してくれた。自分にはとても呑みこめない。けれども合點の行くまで研究してゐれば、二三時間はかゝる。已むを得ず、好い加減に領承した。そこで「羽衣」の曲を謠ひだした。「春霞たなびきにけり。」と半行ほどくるうちに、どうも出が好くなかつたと後悔し始めた。甚だ無勢力である。けれども途中から急に振ひだしては、總體の調子が崩れるから、萎靡因循のまゝ、少し押して行くと、虛子がやにはに大きな掛聲をかけて、皷を「かん」と一つ打つた。

領承す

萎靡因循

自分は虛子がかう猛烈に來ようとは、夢にも豫期してゐなかつた。元來が優美な、悠長なものとばかり考へてゐた掛聲は、まるで眞劍勝負のそれのやうに、自分の皷膜を動かした。自分の謠は、この掛聲で二三度波を打つた。それが漸く靜まりかけた時に、虛子がまた腹一杯に橫合から威嚇した。自分の聲は威嚇されるたびに、よろよろする。さうして小さくなる。暫くすると、聞いてゐるものがくすくす笑ひだした。自分も內心からばかばかしくなつた。その時フロックが眞先に立つて、どつと吹出した。自分も調子につれて、一緒に吹出した。

威嚇す

それから散々な批評を受けた。中にもフロックのは最も皮肉であつた。虛子は微笑しながら、し方なしに、自分の皷に自分の謠を合はせて、めでたく謠ひ納めた。やがて、まだ廻ら

皮肉

なければならない所があるといつて、車に乘つて歸つて行つた。

——漱石全集——

二三　朗詠

春

東岸西岸の柳、遲速同じからず、
南枝北枝の梅、開落已に異なり。

「東岸西岸之柳遲速不レ同。南枝北枝之梅開落已異。」

夏

池冷やかにして、水に三伏の夏なく、
松高うして、風に一聲の秋あり。

「池冷水無三三伏夏一。松高風有二一聲秋一。」

秋

秋水漲り來りて、船の去ること速く、
夜雲收り盡きて、月の行くこと遲し。

「秋水漲來船去速。夜雲收盡月行遲。」

冬

寒流月を帶びて、澄めること鏡の如く、
夕吹霜に和して、利きこと刀に似たり。

「寒流帶レ月澄如レ鏡。夕吹和レ霜利似レ刀。」

旅

孤館にやどる時、風は雨を帶び、
遠帆のかへる處、水は雲に連なる。

「孤館宿時風帶レ雨。遠帆歸處水連レ雲。」

祝

長生殿の裏には春秋に富み、
不老門の前には日月遲し。

「長生殿裏春秋富。不老門前日月遲。」

二四　家の紋

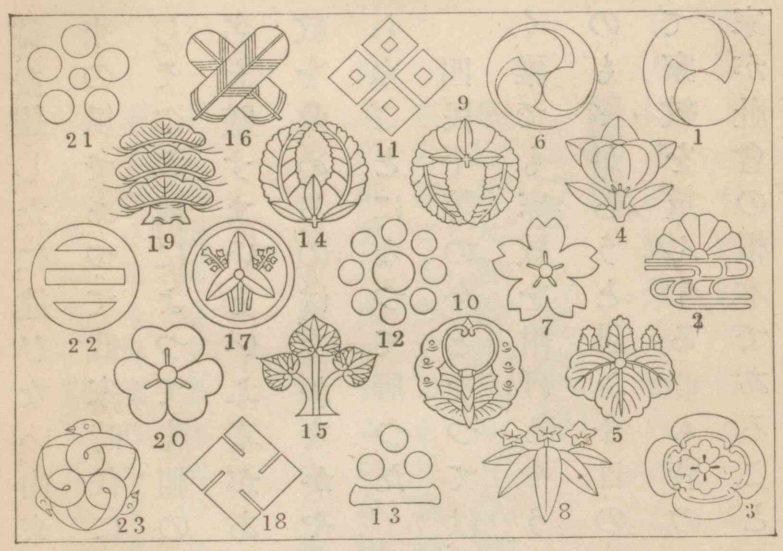
余は曾て羽織袴で西洋人の饗宴に招かれた時、主人から

紋の由來を問ひたゞされたことがある。また先年日本へ來た支那の教育家から、或所の宴會で、同じく紋の起原について質問を受けたことがある。日本服の三つ紋、五つ紋は、外國人の目からは、よほど不思議に見えるのであらう。

家の紋の起りは古いことではない。大凡鎌倉以後くらゐであらうといふ先哲の説がある。元は旗、幕などに附けたのであるが、後には、だんだん素袍（スハウ）、直垂（ヒタレ）、小袖などにも附けるやうになり、自らその家の徽號（キガウ）となり、後には冠婚葬祭の禮式の時には、必ず紋章の附いた着物を着ることになつた。今日では大禮服をはじめとして、通常禮服としては燕尾服（エンビ）を用ひ、通常服としてフロックコートを用ひるなど、洋服を本と

先哲

徽號
冠婚葬祭



1 二ツ巴
2 菊（モク）
3 木水（カウ）瓜
4 橘
5 五七桐
6 三ツ巴
7 櫻（サクラ）
8 笹龍膽（リンダウ）
9 下り藤
10 備前蝶
11 四ツ目
12 九曜
13 三ツ星一字
14 上り藤
15 立葵
16 ちがひ鷹（オモダカ）
17 丸に澤瀉
18 角立萬字
19 三がい松
20 かたばみ
21 星梅鉢
22 丸に二ツ引
23 結び三ツ雁金

して禮裝を定められたから、公の禮服には日本服を着る場合はないが、民間の交際では、紋のある羽織または小袖は、自ら禮服のやうになつて居る。

家紋の發達は武家以來のことであつて武士道と共に

益、發達したに違ひない。由來家系を重んずるのはわが國古來の風であつて、武家時代にはその風が殊に盛であつたから、その家紋によつて先祖の事蹟を忘れず、先祖傳來の家の名を墜すまいといふ考があつたのである。それ故昔は家の紋を改めるのは、なかなかやかましくて、猥りに變へてはならぬことになつて居つた。

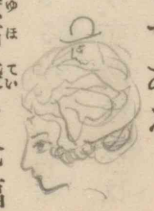
四民平等の今となつては、昔の武士の後裔ばかりではなく、誰でも家紋を附けるやうになり、新しく紋所を工夫したのも多からうと思ふ。今日の世の中は家祿の制もなく、隨つて家紋を重んずる心も昔のやうではないが、わが日本では家が社會の根本であることを思へば、また舊來の家の紋所

四民平等
後裔

を貴ぶ心を忘れてはならぬ。家の紋を貴ぶといふことは、つまりはその祖先を忘れぬといふことである。

自修文

二五　七福神



惠比須、大黑、毘沙門、辨天、壽老人、福祿壽、布袋を七福神と稱へて一幅の畫にゑがくこと、足利時代に始りしことと思はるれども、何人の創意に出でたるかを知らず。七福神が寶船に乘りたる繪を正月二日の夜に枕の下に敷くことも、足利時代よりの習はしなり。

さて七福神の中、惠比須のみは日本の狩衣姿なり、釣竿を肩にし鯛を抱へたる、漁業につとめ、魚類を常食とする日本人の福神としてふさはし。商家にては、毎年十月これを祭りて惠比須講といふ。

狩衣　昔狩や旅行などの時に着た衣服。

大黑はもと印度の神なり。臺所を掌るといへば、食物には緣あるべし。打出の小槌を手にして俵を踏まへたるは、その姿の日本化したるなるべし。これを大國主神と混同せるは、神佛混淆の結果なり。

毘沙門は佛教守護の四天王の一、武勇の神。辨天は七福神中唯一の女神にして、もとは辯舌の神なりしが、辨財天といふより、後には財寶の神としてあがめられしなるべし。毘沙門、辨天共に、大黑と同じくその本國は印度なり。

壽老人、福祿壽、布袋三神の國籍は支那なり。壽老人はその名の示す如く、長壽の神として喜ばれたるなるべく、福祿壽は壽の上に福と祿とを持ちたれば、なほさらなり。布袋のみは支那の歷史上に現存したる人物にて、或寺の僧なりき。小兒を愛して常にこれと戯れたりといへば、兒福者の意味もあるべし。

(一)楚天帝釋の武將で、四人ある。持國天王、廣目天王、增長天王、多聞天王。（毘沙門天）。

衣食財寶に不自由なく、無病息災に子孫繁昌するは、人生生活として最大なる幸福なり。されば七福神をあがめて、この幸福にあやからんとせし古代人の思想も了解せらるべし。さてまた日本、支那、印度と國籍の三つに分れたるも、當時の日本文化の有樣を知るに足るべきなり。

文化　世のひらけたさま。

二六　努力と奮鬪と嗜好

幸田露伴

人間の所爲は隨分多數に分類することができる。そして、その所爲の價値には幾千となく階級もあらうが、努力は確かにその高貴な部分に屬するものである。奮鬪といふ言葉は、努力と稍近似の意味を表してゐるが、これは假想の敵があるやうな場合に適當するもので、努力はわが敵の有無に

自己の最良を盡す
公正

拘らず、自己の最良を盡して、或事に奮勵する意味で、奮鬪といふ意味が有する感情、意義よりは高大で、公正で、明白で、人間の眞面目な意義を發揮してゐる。元來一切の世界の文明は、この努力の二字に根ざして、そこから芽を發し、枝をつけ、葉を生じ、花を開くのであるといはねばならぬ。

嗜好

しかし、努力に比して、その相手のやうに見えるものがある。それは嗜好、即ち好んで爲すといふことである。努力は厭な事をも忍んで爲し、苦しい思にも堪へて勞に服し、事に當るといふ意味であるが、嗜好といふ場合には、苦しい事もう

並行線的
同一線的

ち忘れ、厭ふといふ感情も全くなくて、即ち意志と感情とが並行線的、若しくは同一線的に働いてゐる場合をいふので

俊秀
德澤

ある。努力はそれと稍違つた意味を有し、意志と感情とが相忤し、戻つてゐる場合でも、意識の火を燃立たせて、感情の水に負けぬやうに爲し、そして、熱して已まぬのをいふ。

或人が或事に從事し、そして、その人が我知らず自己の全力をそこに沒して事に當るといふ場合、それは努力といふよりは、好んで爲すといつた方が適當である。そこで、世界の文明は努力から生じてゐるか、好んでこれを爲すところから生じてゐるかといへば、努力から生じてゐる如く見える場合も、嗜好から生じてゐるが如く見える場合もある。例へば、文明の恩人、即ち各時代の俊秀な人物が、或事業の爲に働いて、その德澤を後世に遺した場合を考へて見るに、努力の

批評

結果の如く見える場合もあり、また好んで爲した結果の如く見える場合もある。これは人々の觀察、解釋、批評のし方に因つてどちらにも取れるが、正當に解釋して見たならば、好んで爲す場合にも、努力が伴なはぬ時は、その進行を廢絶せざるを得ない。然らずとするも、偉大な結果を期することはできない。パリッシー[一]の陶器製造に於けるも、コロンブス[二]の新地發見に於けるも、皆さうである。いかに好んで爲すといつても、例へば、有福な人が園藝に從事する場合についても、或時は確かにそれは苦痛を感ぜしめる。即ち手數、緻密な觀察、時間的不規律な勞動に服する等の種々な場合に、努力によらなければ、中途で止むの狀態に立至ることもまゝある

(一) Palissy. フランスの人。各種の色彩模樣を陶器に應用した。（西暦一五〇九年―一五八九年）

(二) Columbus. イタリーの人。（西暦一四三六年―一五〇六年）

道理で、換言すれば、好んで爲すといつても、その間に好まない事情が生ずるのは、人生にありがちな事實である。その好ましくない場合が生じた時に、自己の感情にうち克ち、その目的の遂行を專らにするのが即ち努力である。――努力論――

二七　近江聖人の幼時 その一

村井弦齋

雪ならば幾たび袖を拂はまし
はなの吹雪の滋賀(一)のやま越

それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の、眺も飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を沒し、凛冽たる風は膚を裂く。

(一) 滋賀縣滋賀郡滋賀村の山。

櫻狩
霏々

辛苦の中に滋賀の山をうち越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景。辛崎(一)の松は暮靄(ボヤ)朦朧(モウロウ)の間に隱れて、堅田(二)に落つる雁の聲のみ寒く鳴きわたる。見わたせば白雪皚々(ガイガイ)たる比良(三)の雪、今よりこの山路にかゝらば、山中にて日は暮れん。疲れし足の進み難きに、坂本(四)の邊にて宿を求めんかと、獨旅の少年は前路を睨(にら)んで、暫く湖畔に立ちたりしが、良(やゝ)ありて思ひ返し、「かの山を越ゆればわが故郷(五)、今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しくここに留らん。夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲も厭はじ。いでいで心を取直し、今宵の中にこの山を越えんものを。」と、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそはかゝりけれ。

(一)(二)唐崎夜雨、堅田落雁、比良暮雪いづれも八景の一。
(四)滋賀郡。
(五)滋賀縣高島郡小川村。

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖にすがりてたゞ一人、たどりたどりて行く道の、岩につまづき木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、なほも心を勵まして、風雪の中を登り行く。やがて日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌增す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。一山寂莫として、耳に答ふるものとては、閉ぢし氷の下潛る細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響なんど、幽かにもの凄く聞えて、怖しとも悲しとも譬へんや

中江藤樹

彌增す寒さ

進退谷る

うなし。かゝる難所と知りもせば、麓にて一夜を明ししものを、旅慣れぬ身の悲しさ、足に任せてこの深山路へかゝりしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。少年は進退谷りて、半ば死せるものの如く、松の根方にうち倒れたり。起きも得上らず、少時降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に餓を感じて、寒さは一入身にしみわたり、眠るともなく死ぬともなく、前後も知らずなりにけり。

懐かしの故郷や。藤太郎は昔覺えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲もうち忘れ、路を急ぎてわが家の方へ向かひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、

須臾

衡門

脩竹

道々の家は未だ多く起出でず。かの家はわが友の家なりけり。この家には我に優しき老人ありきなどと、昔のことを想ひ出でて、すゞろにあはれを催しつゝ、須臾にしてわが家の前に來れり。

二八　近江聖人の幼時　その二

見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて、復昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり。築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人なければ枝繁れり。脩竹一叢思ふまゝに根を延して、彼方此方に生出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬに

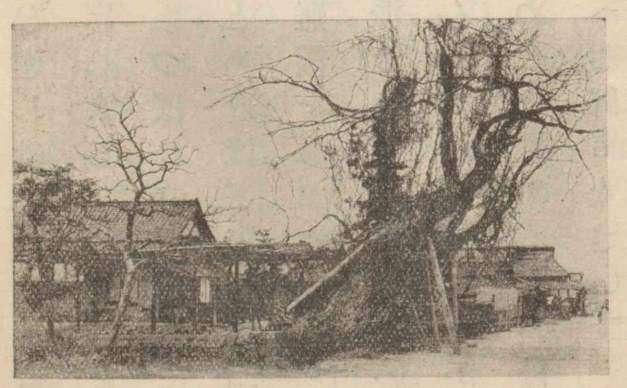
やあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れば、車井のきしる音さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確かに母人なり。少年は忽ち胸塞がりぬ。昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出でられしことなき母様が、この雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情なしと、湧出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈行きて、後よりその袂を引き、「母様、私が汲みませう。」と、涙ながらに取りすがる。

事の不意なるに母は驚きて振返り、「誰か。藤太郎。どうしてここへ。」藤太郎は細き聲「はい、母様の御手助をいたしに參りました。まづ内へお入りあそばせ。おつむりに雪が掛ります。」と孝子の眞情、片時も母をこの雪中に立たしめざらんとす。

和郎

眉を揚ぐ

母は車井の綱をしつかと握りしめ、石の如く立てり。「叔父様とでも御一緒か。」「いえ、一人でございます。」母は聲を勵まし、「叔父様が一人和郎をお出しなされたか。」「いえ、叔父様には知らせずに參りました。」母は眉を揚げ、「怪しからぬ。何故そんなことを。さあお話しなさい、和郎が歸つたわけを。いえ、ここで聞きませう。聞かないうちは、めつたに家へは入れません。」さつと吹きくる朝風に、地上の雪はくるくると捲揚げられて、横に二人の顔をうつ。



中江藤樹の舊宅

藤太郎は歸りし次第を物語りぬ。母はわが子の優しき心根に、すゞろ涙に咽せびしが、忽ち思ひ返しけん、わざと言葉を勵まして「和郎はこの母の言葉を忘れましたか。和郎を叔父様に賴む時、一旦國を出たからは、あつぱれ立派な人にならないうちは、決して中途で歸るなと、あれほど堅く言聞かせたことを忘れましたか。この母が難儀を忍ぶのも、たゞ和郎を立派なものにしたいばかり。立派なものにならないで、家にゐて手助をしてくれたとて、なんのそれがうれしからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬことはあるまい。母は再び逢ひません。その足ですぐ大洲(一)へお歸りなさい。」

餘りのことに、藤太郎は默然として言葉も出でず、力抜けて、雪の上に跪きぬ。母はその失望せる樣子を見て、痛はしさ胸に滿ち、かくまでわが身を思うて來りしものを、百里の道の一人旅、定めて憂きことも、つらきことも多かりしならん。せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにしてまた思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば修業の邪魔。獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを、「和郎は母のいふことがわかりませんか。」と強くは叱れど、聲はうるみぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて「はい、わかりました。」「それなら今から歸りますか。」藤太郎は悲しき聲「はい、歸ります。」と素直にいふ。母は素直に答へ

(一)伊豫國喜多郡。

默然

なまなかに

られては、なほさら腸の絞らるゝ思。遂に堪へかねて忍泣き、袖咬みしめて聲を呑む。藤太郎は屹として立上れり。「母様、この藥はあかぎれの妙藥で、世にも得難き品。これ差上げたいとわざわざ持つて參りましたもの。これだけはお取りなされて下され。」と、途中にて得し藥を差出す。母は快く「おゝ和郎の志、これだけは受けませう。」と手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合はす顔、互の眼には涙一杯。

母は耻づかしと、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、藥を手より取落してうつ向けば、雪の上にほろほろと落つる涙。

雪はなほ霏々たり。母が汲置きし水を見れば、いつの間に

聲を呑む（皺）

張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く泣くわが家を立出でたり。見送る母、見返る子。滿天の風雪路悠々。

路悠々

二九　雪　晴

—近江聖人—

白鳥省吾

雪ばれの日には
森の老杉も古い憂鬱を棄て、
新しいはなやかさに煙き、
思ひ出したやうに碎ける雪の塊、
まるで妖精の踊のやうだ。
そしていつも陰氣くさい烏までが、

餌以上の尊いものを拾つたやうに、
身輕く翼を光らして飛んでゐる。

あゝ、寒冷な雪景の
なんといふ美しい平和だ。
その時無言の「時」が流れ、
私の心が靜かに燃え、
樂しい現在を生きてゐる。

かうした時には、
遠い友やあらゆる人々が
妙に懷かしくなる。
そして大地のあらゆるものが、

遠方に春をかくして、
靜かにその生を樂しんでゐる。

自修文

三〇　樹木と雪と人

前田夕暮[一]

黑い長靴を穿いて、黑いオーバー[二]を着て、青い頰被をした人が
一人、長い竹竿を持つて立つてゐる。
春の雪が降る。ほたり、ほたりと降る。
樹といふ樹は、葉といふ葉は白く降り埋められて、青い泰山木の梢は、葉に積つた雪の重みに堪へかねて、地に屈きさうになつてゐる。
泰山木の隣のもちの樹は、ぶるぶると一ふるひ雪をふるひ落しさうに見えて、素直にその照り青い葉の表に、まばらに降りつませてゐる。

(一)歌人。名は洋造。神奈川縣の人。明治十六年生。
(二)Over-coat.（オーバーコート。）（外套）
泰山木　常綠喬木。葉はゆづり葉に似、初夏大きな白花をつける。

（藤）

燦爛（きらきら。かそかに。かすかに。）

もうぽつちりと芽を薄赤く吹いてゐる木瓜のしをらしさ、雪に埋れて愈〻密かな悦を隱してゐる。

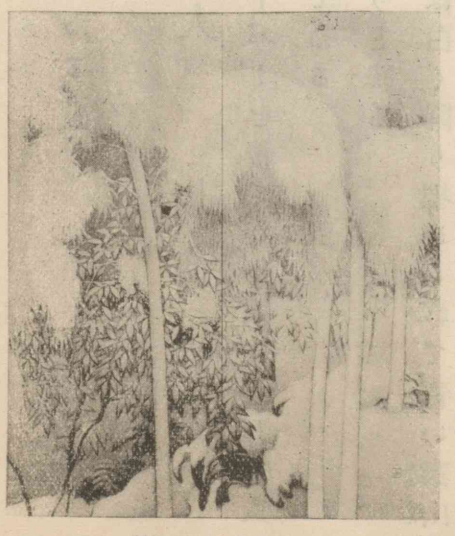
百日紅はまさに燦爛として光を放つてゐる。空に明るく八方にその枝を展げて、風にゆらゆらと搖れながら、かそかに青く光つてゐる。

雪に素直に從ふものは竹である。どの木よりも先にその重みを尖に感じて、地の雪をするほどに枝垂れてゐる。

川楊の枝の赤さは愈〻赤く、木斛の葉の青さは愈〻青く、ユクカ(一)の長い冷たい葉の觸覺は、春の雪の薄青い味は

(一) Yucca. 百合科の植物。いとらんと譯する。

觸覺（はだざはりで感ずること。）



靜寂（阿部春峰筆）その一

味到（よくあぢはふ。）

ひを、いかにしみじみと味到することぞ。

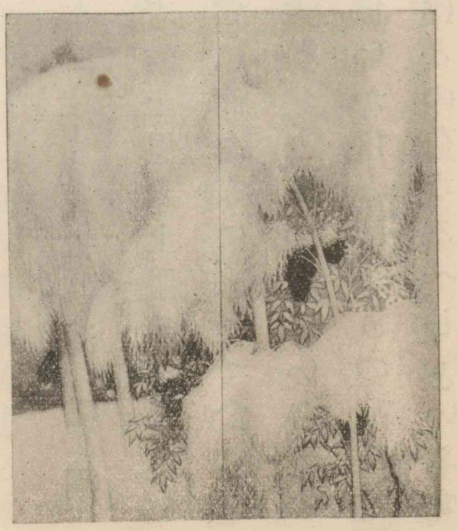
これ等の雪の風景のなかに、黑いオーバーを着て頰被をした人が一人、長い竹竿を持つて立つてゐる。

忽ち竹竿は空に渦をゑがいて廻轉する。

泰山木にちらちらとあたる。もちの葉をはらはらと拂ふ。青笹をさつと彈き返す。

木瓜を、木斛を、地上のユクカを、薔薇と、川楊と、八手と、そして椿と、ヒマラヤ・シーダー(一)と、松と、檜葉と、南天と、楓と、枯れつゝじとを、

(一) Himalaya cedar. ヒマラヤ杉とも印度杉ともいふ。



靜寂（阿部春峰筆）その二

はらり、はらりとうち拂ふ。

燦爛として散る雪のなかにうち振る青竹竿の觸手は、あらゆる木といふ木、葉といふ葉、枝といふ枝に積つた雪を、更に燦爛としてうち拂ふ。

雪はもう止んで、青空がうつすらと見えてくる。

三一　土器賣る翁

柳澤淇園

土偶人

伏見より年七十歳許なる老翁、土偶人、土器のたぐひを擔ひて、洛中を賣りありくあり、常に商ふ家に來りて食事をするをりから、その家の奉公人大勢集り、かの翁にいひけるは、「御身の擔ひたるものは、その價いかほどばかりの品にか。」と問へば、翁答へて「銀十五六匁ほどの荷なるべし。」といふ。また問ふ、「京の町は人のゆきかひ繁き所にて、若し過ちて皆碎くまじきものにもあらず。さやうの時はいかがする。」といへば、「それこそ過なれば、さることなしとはいふべからず。さある時は、そのことをありのまゝに陳べて、我等も年久しく商ふなれば、一荷くらゐは情にて借受けて商ひ申すなり。」といふ。また問ふ、「その上にもまた碎くまじきものにもあらず、その時はまたいかがする。」と詰りいへば、「いかに問屋なりとて、數度の無心もいひ難ければ、そのをりこそその許たちの如く、奉公なりともいたすより外にせんかたなし。」といへり。

無心

——雲萍雜志——

三二　武藏野の二月

中西悟堂

二月となると、武藏野の風景は荒涼とした趣を呈してくる。廣い平野のそこここに斷續してゐる雜木林も、殆ど葉といふ葉を落してしまつて、幹と枝とばかりがわびしい日光にほの白く光つてゐる。そして、褐色に乾いた僅かばかりな枯葉が、枝の尖端などでかさかさと干からびた音を立てながら、風に飜つてゐる。

野の面は見る限り寂しく黑土を現してゐる。なんにもない田には、鳥の群が餌を漁つてゐる。麥畑の麥も二寸ほどしか伸びてゐない。あとはところどころに霜除の藁を施した

（葱）

ねぎの畑や、枝を結び合はした桑の畑があるばかりである。

この一望寂寥な野の上を、木枯ばかりが、赤兒の泣聲のやうな聲を立てて荒廻る。二月は木枯の月だ。晴れた日には蒼い天空から天空をそれは渡つて行く。高邁な騎乘のやうに、彼はその行手を知らない。野の果に見える相模や甲州(一)の山脈の方から吹いて來たり、北の方から疾い速度でやつて來たりする。さういふ時には、いつ

高邁

(一)關東山脈。

冬枯の武藏野（藤森德太郎筆）

(一)神奈川縣。大山の北西約二里。海拔五一七一尺。

巍然

往還

も大山や丹澤山(一)の姿がはつきりと見られる。そして、それ等の連山の上に巍然と聳えた大屋根のやうな富士が、碧天をぬいて一入清く、白玉のやうに立派に見られるのだ。かうした山々の姿は、殆ど武藏野の到る所から眺めることができる。どの往還からも、どの林間からも、どの村路からも同じやうな構圖で見られる。木枯で洗ひ立てられた山の明朗な姿、それは日沒の時のそれの莊嚴さ、曙の時のそれの清澄さと共に、武藏野の美觀だ。

曇日の木枯。――これは晴天の日のそれと違つて、地上低く吹きまくる。樹の繁みもなくなつて、をりから遮るものもない空白な野を、凄じい雲の流と共に走る木枯は、田の面と

戰慄
鳴擾

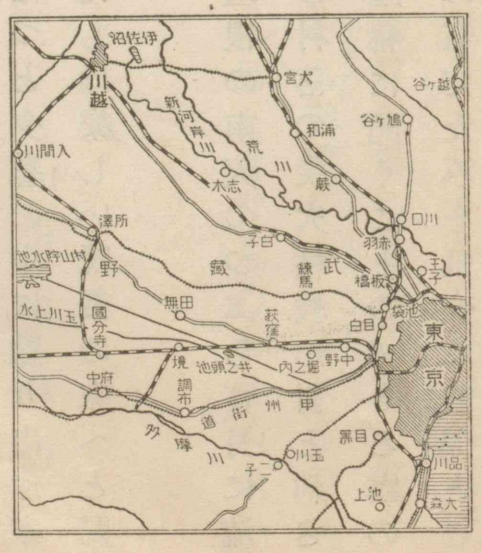
林とを問はずに吹きぬけて行く。さうした時、殊に悲壯な光景を見せるのは、雜木の枯林である。あらゆる幹と枝とが恐怖に打たれて逃迷ふもののやうに、戰慄し、號叫し、軋み、鳴擾する。そして、それは一つの林と他の林とが遠く隔りながら、呼合ひ答へ合ふ悲鳴となつてしまふ。全體が搖れ狂つてゐるあちこちの林は、落し殘した褐色な枯葉の群を、花火のやうに空に舞はす。そして、また林に籠り棲む雀や四十雀などの群が、烈しい林の騷擾に驚いて、中空へ一齊に舞立つが、木枯に抵抗しかねて、また一團の黑いしみとなつたまゝ、枯葉の群と共に再び林に落下する。これこそ武藏野の二月が見せる激越な景物だ。

精悍
松籟

さういふ時は、また私たちは松林の奏でる調高い松風の音をも聞く。一體武藏野には雜木林と共に松林が多い。木枯の日には、それ等の松林が灰色の空にべうたる精悍な松籟の胡弓を彈く。それはあの喬木自身の亭々たる心を語るやうに、氣高く猛く咽せび立てる。

さて私たちは晴れた日を選んで、散策の爲に武藏野に出る。境、田無、所澤あたりの林の多い所、多摩川べりの明るい野、伊佐沼あたりの曠原、どこでも氣の向く所でよい。若しもそれが非常に早い曉だつたら、綿のやうな朝もやの剝げるにつれて、その下から白妙の、そして、薄紫にさへ見える渺茫とした霜の景色を私たちは見る。畑、丘、川岸、田のすべてを蔽つ

て幾里も續く霜、そして、更に太陽が野末に現れる刹那に、それが一樣に寶石のやうにかゞよひわたるのを見る。それから後は霜解の始らぬ前、午前八時か九時に至るまでの間を、畑や川べりを選んで歩きながら、思ひきり凛とした朝の空氣を樂しむがいい。林の中を歩くなら、枯葉や落葉の露と霜とが乾いてしまつた午後の方がいい。そして、それはまた日沒を見る爲にもよいのである。西の空に血潮を吹くやうな日沒の莊嚴さは、枯林の間から見るの



（槻）

が最も魅力が深い。かくて一日の散歩を終つて、甲州街道のやうな街道に出るなら、道の両側の中天高いけやきや、つきの並木の梢にまつはる夕もやの匂が、どんなに私たちの胸をもの悲しくさせ、人懷こくさせ、優しくさせ、そして、家こひしくさせるか知れない。ぽつぽつと夕暮の中に點り出す家家の灯を懷かしみながら、私たちは樂しい晩餐の家へと歸路をたどるのである。

雪に埋る竹林の藪柑子や、垣根の南天のつぶら實、月に流れる梅の花の素香、霜深い朝の村落の焚火、枯枝が針と刺さる夜空にきらめく美しい星座、稀に聞くことのできる雪の夜の狐の聲、水の涸れた小川の石だたみを飛交ふ鶺鴒と、こ

の季節のものはいろいろあるが、ともかくも二月の武藏野は、凋落の武藏野であり、春への忍耐の爲の謹直な武藏野である。そして、私たちがその風景と地平線とから學ぶものは、嚴肅と、謹直と、敬虔と、凛とした氣品と、眞實との自然の深い教訓である。

三三　珊瑚礁

山崎直方

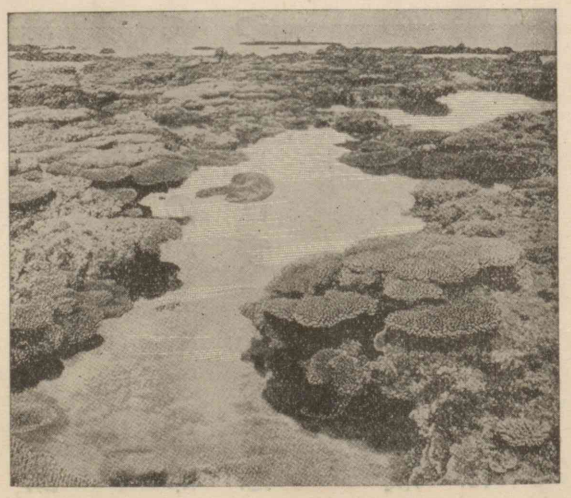
南洋の自然界に於て最も興味あるものとしては、何よりも指を珊瑚礁に屈せねばならぬ。珊瑚礁は熱帶海洋、殊に太平洋の特色であつて、わが統治する諸島の如き、その陸島たると火山島たるとを問はず、その種類に富み、殊に大部分は

蟠屈す
槎枒

島そのものが全體珊瑚礁からできてゐて、洋中に孤立してゐる。珊瑚礁の存在は、すでにわが領土中小笠原島、琉球諸島、臺灣等の沿岸地方に認め得られるが、その規模、その光景、固より南洋諸島のそれと比べることはできぬ。由來珊瑚は極めて清澄な海水を好むもので、南洋の海水の透徹せることは、碇泊した艦船が、水中を透して、船底の龍骨までありありと見ることができるほどである。波靜かな礁湖の稍淺い所で、のぞき眼鏡を用ひて、清く温かい海底を窺ふ時、珊瑚の林は實に筆紙に盡し難い美觀を呈してゐるのに驚かされる。

珊瑚の中には樹枝狀のものが多い。その蟠屈した根株を張り、槎枒たる枝を交へた有樣は、實に千姿萬態であつて、多

くは白色の中に、或は鮮かな淡紅色、或は美しい菫青色を交へてゐる。珊瑚の枝々の間には、各種の藻類、殊に堅い石灰質の葉をもつた石灰藻も少くない。これ等が互に茂り合ふ有樣は、實に秋の野に八千草の咲亂れた趣がある。そして、その珊瑚の林の中には、大きななまこが數知れず横たはつてゐるかと思へば、また青綠紅紫、熱帶の色彩眩いばかりな大小の魚族が、その間を縫つて泳いでゐる。パラウ(一)やマーシャル(二)などには



珊瑚礁

（沙嘆）
(一)Palau. パラウ諸島。太平洋中にある。フィリピン諸島の東方。
(二)Marshall. マーシャル諸島。太平洋中にある。

（礁礫）

長さ三尺にも達する巨大なしやこ貝が横たはつてゐる。濵の眞砂の飽くまで白いのは、いづれも珊瑚の碎けてできたものであるが、その中には、また海水中に浮游する微細動物の抜殼も少からず混つてゐる。燐礦の産を以て名高いアン(一)ガウル島の海岸に打上げられてゐる砂の如き、殆ど全部がけし粒大の有孔蟲の抜殼であつたのには、實に驚奇の感に打たれた。

（一）Angaur. 大洋洲西北部パラウ群島中の島。

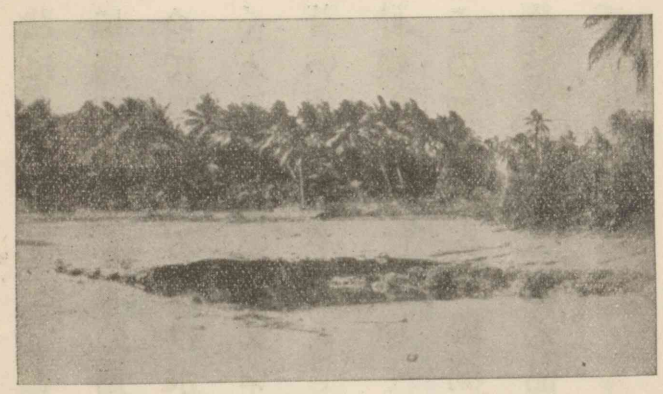
（罌粟）

毀損

珊瑚島は常に蒼々たる椰子の森を戴いてゐる。初に栽培したものもあるが、多くは自然生である。元來椰子の實は、厚い纖維質の果皮を被つてゐるから、よく海流に浮かんで、遠く漂流することができる。偶、岩に當つても、容易に毀損する

自然の配劑

ことがない。それが流れ流れた末、珊瑚島に打上げられると、始めて根を下して生長する。自然の配劑は、誠に此の如く巧である。珊瑚島は極めて低い島であるから、椰子の森の方が島そのものの海抜よりも高いものが多い。されば珊瑚島の島影が海客の眼に入るのは、よほど近距離へ來てのことで、十浬も離れると、最早その影を見失ふことがある。有名な世界的航海者マジェラン(一)が始めて太平洋を横斷した時、南太平洋のバウモツ諸島の



椰子

（一）Magellan. ポルトガル人。航海者。（西暦一四八〇年―一五二一年）

一珊瑚島からマ(一)リヤナ諸島にくるまで、幾千浬の八重の潮路に、途中幾百となく散在する珊瑚島の隻影をだに認めずに過ぎたのも、その爲である。冲合から珊瑚島に近づく時始めて眼に入るのは、水平線上一抹の蒼い線である。更に近づくと、その蒼い一文字の下に白い線を見る。いふまでもなく、蒼い線は椰子の森で、白い線は水際に打上げられた珊瑚の砂礫と、そこに寄せては返し、返しては寄せる磯波とである。この細く平たい珊瑚島が、或は長く或は短く水平線上に點綴された狀は、恰も品川冲の臺場を遠望するやうであると、或人はいつた。

—我が南洋—

(一) Mariana. 小笠原島の東南太平洋中の諸島。八重の潮路

三四　春を待つ歌

北風のすさぶがまゝに、
野も山もうらさびたれど、
草木やゝ芽はふくらみて、
あたゝかき光を待てり。

ひねもすに口をつぐみて、
鶯は谷にこもれど、
笹かげに空をうかゞひ、
巣を出づる構やすらん。

冲邊ゆく白帆も稀に、
浪の花岸に凍れど、

たちならぶ粗朶に青みて、
海苔の香の高きが着けり。

やがて見よ、月はおぼろに、
島影は夢かとうかび、
春の海靜けきゆふべ、
さくら鯛をどらん近し。

かくて今春は隣れり。
雪分けて若菜も摘まん、
遠近の梅も尋ねん、
樂しきは春まつ心地。

―高等小學讀本―

三五　靜かな春

生田春月

×

この都會では正月を過すと、春はいつでも町の花屋の花から訪れてくる。

ことしも桃色にふつくり咲いたつゝじの切花が、私の家の竹の縁に、小さい壺に挿されて置かれてから、もう十二三日くらゐもたつであらうか。

この間に一度雪が降つたので、その雪どけの寒さの中で、冷え冷えとその桃色の花が忍んで咲いてゐるのを見る毎に、私の口には自ら「春遠からじ……春遠からじ……」との句が、慰めるやうにのぼつてくるのであつた。

屈託

あゝ春。ほんたうに懷かしい春。新しい爽かな袷を着ることもできるし、色あせた冬の外套を輕い外套に取替へることもできるし、青い青い麥の畑を車窓から眺めながら、美しい川の流の上の鐵橋を渡る汽車に乘ることもできるし、どこかの山里に近い温泉宿で、ぶらぶらと二三日を屈託もなしに過すこともできる。なんと思ひ浮かべても、樂しいのは春の旅ではないか。

「春し待ちなば花咲かん……」

ふとかういふ句も口に浮かんでくる。

今は事志とたがつて不遇に暮す身にも、いつかは春はやつてくるのだ。そして、花の咲く日もあるのだ。

今に春がくる。今に花も咲く。かう思ひつゝ、忍び難いことも忍び、むづかしいことも努力努力で耐へ忍び勤勞する人の心は、なんといつても素直なものではないか。

×

若いものにとつても、老人にとつても、それぞれの意味で春は待たれる。ひたすらに待たれる。

春がくれば、貧しいものも貧しいなりに快活になり、病んでゐるものも病んでゐるなりに幸福に近づくのを感じ、健かなものは健かなだけに、はじけるばかりの元氣が出るのである。

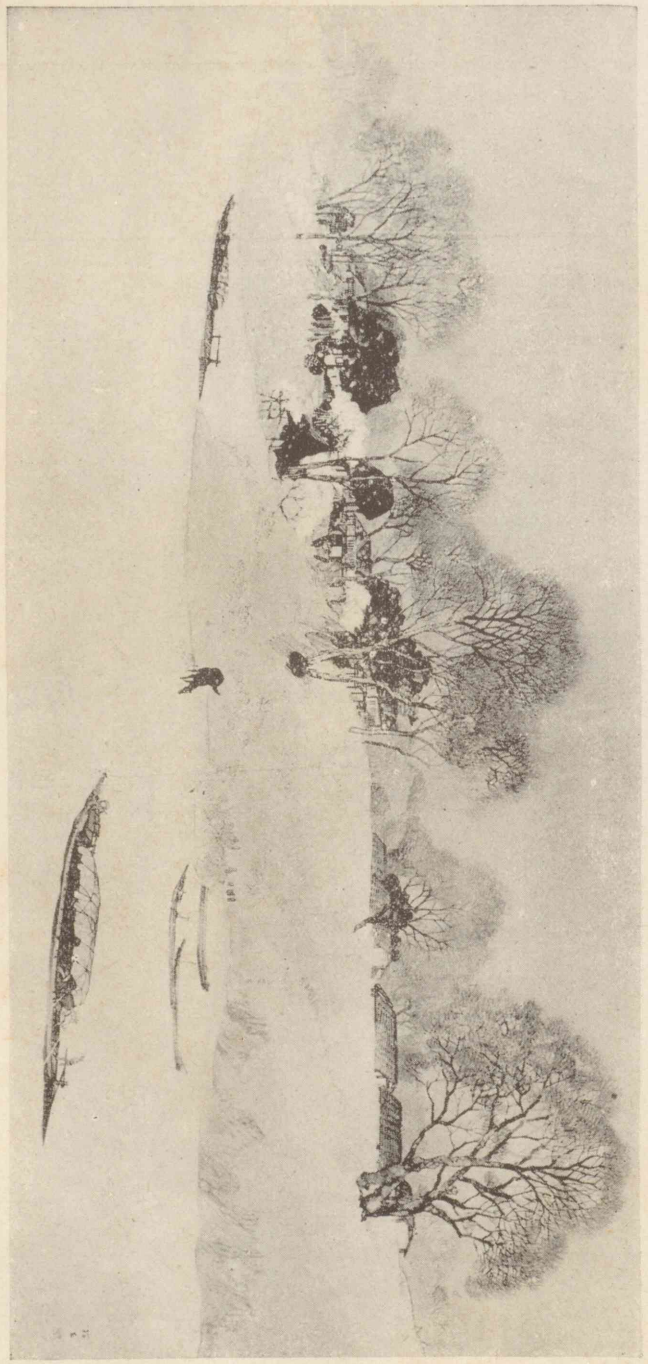
この心からの春の思慕は、それがそのまゝ詩の心である。

詩といふものは、もともと魂の思慕であるといつてもいいのだ。そして、その心の動きが、自分の律動にふさはしい詞を選ぶのである。

外國の書物を見ると、かういふ春への思慕が、北歐から南歐イタリーへの旅のあこがれになる。雪と氷とに埋められたロシヤやスカンディナビヤ半島の方から、暗いイギリス(一)から、灰色のカナダから、(二)世界漫遊客が列をなして集つて行くのが、かの「ミルテ(三)の樹は靜かに、ローレル(四)は高く。」と歌はれたイタリーの青空の下である。ギリシヤ(五)、ローマの古典的な旅である。

それが日本では京都であり、奈良である。佳い春をごく少

(一) Scandinavia.
(二) Canada.（加奈陀）
(三) 獨語Myrte,（英語Myrtle）てんにん科の常綠灌木。
(四) Laurel.（月桂樹）
(五) Greece.（希臘）
古典的



筆丘梅島川　春の川流

ししか持たない東京に住んでゐるものにとつては、北歐人が南歐を思ふやうに、京都、奈良を思ふ。

×

日本の春はまづ京都、奈良にとゞめをさす。

とゞめをさす

菜の花が黄色に續いてゐる大和路を、寺から寺へ、村から村へとさまよふ氣持はどんなであらう。餘りの長閑さについ眠たくなつて、どこかの丘の草の上に寢こんでしまひはしないだらうか。

青いといふよりは寧ろ黑く眠つたやうな東山(一)三十六峰から、北山、西山、淀(二)、山崎(三)の山々に圍まれたあの盆地に、温かい水のやうにたゝへられた春光を浴びながら、洛中、洛外の春

(一)京都市の東に連なる山々。
(二)(三)共に同市の西南方。

逸興

をたづねて名僧、隱士、美姫の遺蹟を弔ふのは、いかに心ゆく限りの逸興であらう。

春のくる毎に思ふのは京である。奈良である。

去年の春、ちやうど花も少し盛を過ぎた時分、私は京都へ行つて、古い寺々を見まはつた。そこでは、いろいろなものが見られたし、いろいろなことが考へられた。けれど、あんまり多くを見、多くを感じたので、感情の疲勞を來して、反つて印象がぼんやりしてしまつた。

それよりも私が忘れ難く思ふのは、洛西嵯峨(一)のあたりをさまようた一日の樂しさである。そこにも、ところどころ菜の花が青い麥畑の間を點綴して、ありとしもない風が、ほの

(一)京都府葛野郡。大井川の東岸

ありとしもない

哲人

(一)推古天皇の御甥。

(二)推古天皇の十二年四月。

かにそよいで過ぎる。さすがに都ばなれのした小徑を、ぶらり、ぶらりと歩いたり、たゝずんだりして行くと、行く所に何か心にさゝやきかける古代の面影が、花となり胡蝶となり、夢となり幻となつて、そゞろに懷古の情を募らせる。

—旅ゆく一人—

三六　哲人聖德皇太子

高島米峰

私の最も崇敬する偉大な哲人を過去に求めて、私はまづ聖德太子(一)を擧げざるを得ない。聖德太子の偉德鴻業は山の如く高く、海の如く廣く、到底筆紙のよく盡すところでない。憲法十七條(二)を定めて平和の理想を宣言し、この理想實現

基調

闡明す

(一)推古天皇の十一年十二月。

人材登用

閥族跳梁

の爲には、佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とすることの切要を認め、更にこれに依つて、天皇中心主義を闡明して建國の精神を振作し、また官位十二階を定めて人材登用の門を開き、以て閥族跳梁の弊を一掃して、內政を充實し給うたので、日本の面目はここに全く一變するに至つたのである。啻にそればかりでなく、當時世界の最大强國として、最も文化の進化した支那――支那は恐らく日本をその屬國くらゐにしか考へてゐなかつたであらうほど、それほど日本の世界的地位は低いものであつた。――と對等の國交を結ぶことになつたといふのは、實に聖德太子の偉大性の、いかに驚くべきものであるかを看取せしめられるの

(一)第三十三代。

(二)近江國滋賀郡小野村にゐたので小野と稱する。

(三)支那に於ける國號。

である。

聖德太子は推古天皇の十五年に遣隋使發遣のことを決定し給ひ、(二)小野妹子が使節に任ぜられて、その年七月に出發した。この年は隋(三)の煬帝の大業三年で、妹子が煬帝に差出した國書の冒頭には、

日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す。恙なきや。

とあつて、實に堂々たるものであつた。從來支那は自ら中國を以て任じ、東夷南蠻西戎北狄と、四方の國々を野蠻國あつかひにしてゐたので、日本の如きも、いはゆる東夷の中の一くらゐに考へてゐたのであらうが、その日本から、突如とし

てかうした對等な禮を以て書を贈つたので、煬帝は甚だ不快に感じ、一度はこれを却けたのである。が、しかし、これほどの國書を差出す國は、一體どのくらゐな文化を持ち、國民の生活がどのくらゐ進んでゐるか、ともかくもその實情を知る必要があると思つたのであらう、斐世清といふものを使者としてわが國に遣すこととなり、斐世清は小野妹子と共に、翌年四月難波に着いたのである。この隋使斐世清の報告が、日本を隋と對等なものにするか、それとも依然として屬國あつかひにするかといふ最も重要なものであつたので、聖德太子はその待遇については、頗る心をお籠めになつたらしい。まづ朝廷では飾船三十艘を以て一行を難波の江口(一)

(二)淀川の河口。

に迎へさせ、難波の新館をその旅館に充てて、優遇到らざるなく、また彼が都に入る時には、飾騎七十五疋を以てこれを大和の海石榴市(一)の衢に迎へ、天皇の謁を賜ふ時には、有司百官が定められた冠位に隨つて、綺羅星の如く宮廷に居並んだといふので、さすがの斐世清もすつかり感服してしまつたらしい。その結果、彼が歸國の時、第二回遣隋使として再び小野妹子を遣すこととなり、その時妹子の持つて行つた國書は、これもやはり聖德太子の筆に成つたもので、實に大文章であつた。さすがの隋の煬帝も、斐世清の報告やら、かうした堂々たる二度の國書やらで、もう否應なしに、對等な國交を結ばなければならないことになり、隨つて支那は、日本を

(一)磯城郡。今三輪村大字金屋の中。

完全な獨立國として、認めなければならなくなつたのである。これ實に、聖德太子の理想の一面が、遺憾なく實現したのであつて、わが國が金甌無缺な國體を維持して今日に至り、更にその天壤と共に窮りなきを期し得られるのも、これ等に淵源するところが頗る多いのである。

聖德太子の御事業は、右に述べた外、外國文明の輸入でも、美術工藝の奬勵でも、歷史の編纂でも、憲法の創制でも、冠位の制定でも、曆法の研究でも、何一つとして偉大でないものはないが、その中でも最も重要なものは即ち天皇中心主義の徹底、最も意義あるものは即ち佛敎の興隆、最も華やかなものは即ち日隋對等な國交であつて、これ私が哲人として

金甌無缺

崇敬し讃嘆し奉る所以なのである。

惟ふに日本開闢以來、皇太子で攝政の大任を帶びさせられた方は、僅かにお三方しかましまさぬ。しかも、その中のお二方が、皆二十代の青年でこの大任を帶び給うたといふことは、現代學生の最も尊い龜鑑でなくてはならない。そのいはゆる攝政皇太子のお三方と申し上げるのは、推古天皇の攝政皇太子聖德太子、齊明天皇の攝政皇太子中大兄皇子、今上陛下の攝政皇太子裕仁親王殿下にましまし、聖德太子は二十歲、中大兄皇子(後の天智天皇)は三十歲の時に、そして、私たちの敬愛し奉る皇太子殿下は二十一歲の時に、攝政の大任を帶びさせられることとなつたのである。聖德太子攝政

龜鑑

(一)第三十七代。
(二)舒明天皇の皇子。
(三)今上陛下。

の時代にも、中大兄皇子攝政の時代にも、日本が内に充實し外に躍進したといふ事實から考へ合はせて、どうしても大正の日本もまた、わが聰明英邁にわたらせられる皇太子殿下の御威德によつて、更に一段と内に充實し外に躍進すべきことを、確信せざるを得ないのである。

千木高知り
太敷立て
綱根

三七　日本國民と自然美

上代に於ての衣食住は、多くはわが國土に繁茂してゐる植物から材料を取つた。千木高知りといふ千木も、太敷立といふ宮柱も、皆木材であつたことはいふまでもなく、藤葛を以てくゝりつけてこれを綱根といつた。楮衣のしろたへ、

すり衣
（櫨）
（笥）草枕

麻衣のあらたへ、これを染めるのは草木の汁で、すり衣であつた。正木、日蔭等の蔓草を取つてかづらともし、たすきともした。梓、はじ、檀を以て弓を作り、柳、篠を以て矢をはいだ。葉盤、葉椀は木の葉を編んだものらしく、今の茅卷、柏餅にその名殘を留めてゐる。萬葉集の

家にあればけに盛る飯を草枕
たびにしあれば椎の葉に盛る

といふ歌で上古の風俗もわかる。到る所植物の繁茂した國土は、國民に向かつて、衣食住の材料をすべてそれから取らしめたのである。

日本の娘の着物の模樣のはでやかなのは、西洋人の著書

にもいつも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、なほさらそれよりも綺麗である。自然に衣服にもこれが染まつてくる。昔のしのぶのすり衣、今の振袖模様、裾模様、つまりは同じことである。菊や、櫻や、梅や、牡丹を大きく染出した縮緬、友禪、繻珍の帶から、下駄の鼻緒の先まで、自然界の草木、花模様で飾られてある。その色合の名稱でも、櫻色、桃色、山吹色、栗色、葡萄色など、植物界から取つた名が多い。昔の女裝束は櫻重ね、梅重ね、山吹重ねなど、重ねの色合は、常に四季をりをりの花に因んであつた。優しい女流の裝束は當然ともいはうが、武士の戰爭にいでたつ甲冑裝束にも、小櫻をどし、卯の花をどしなど、いかにも優美ではないか。總じてわが國の

友禪
繻珍
重ねの色合

甲冑は、當時の平服のはでやかなのに似合つて、いかにも美しい華麗なものであつた。馬の鞍にも青貝おいて、花などを散らしてある。

日本人がいかに植物界や一般自然界に趣味を有するかを、食物の方面に見れば、春秋の彼岸の牡丹餅、お萩の名を第一として、菓子屋の目錄を一見して、一層その多いことがわかる。松風、紅梅燒、磯松、桃山などの一般名稱はいふまでもなく、柏餅、撫子餅、櫻餅、菱餅、茅巻などの外、植物以外の自然に取つたものでも、鶯餅、洲濵、時雨、越の雪、落雁、しほがま、八橋、さゞれ石などの類がある。名稱ばかりではない、形も花木に取るのが多い。干菓子は別して松の葉や、菊の花や、すべて花木の

(一)東京市本郷區の有名な菓子店。

(棗)
(匙)

形にこしらへるのである。藤村(一)の目錄などを見れば、細かい名は夥しいものである。汁粉の名なども十二月に配當して、それぞれ雅稱がある。酒にも櫻正宗がある。菊正宗がある。灘菱がある。山川の白酒がある。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ひられるが、魚類の料理もまた植物界とは緣が離れぬ。刺身やすしの下には笹の葉を敷く。牡丹餅や赤飯などを贈るには、重箱に南天の葉を敷く。料理の膳椀は、金蒔繪で花木の形を裝飾とする。漆器、陶器一切の美術工藝品が、多く草木花鳥の繪であることは固よりいふまでもない。これは裝飾美術として、近世のヨーロッパの美術にも少からぬ影響を與へたものである。茶の湯のなつめなどはもとより、俗にさじ

(一)Erwin Baelz. ドイツの醫者。長い間東京帝國大學に御雇教師であつた。（西暦一八四九年―一九一三年）

を蓮華といふのも優美である。

自修文

三八　清淨潔白

小ざつぱりとした木綿物は氣持がよい、新しい青疊は居心がよいといふわが國民は、清潔を愛する民族である。隣國の支那人などと比べては、大きな相違である。日本人のやうに盛に全身浴をする國民は外にはあるまい。東京市の湯屋は千軒もあり、その外、中流以上の家には各湯殿があつて、二百二十萬の住民の中凡そ三分の一づつは、毎日入浴する割合だといふことである。ベル(一)ツ氏は、日本の氣候家屋の割合に、リウマチスの少いのは、全く日本人が錢湯を好む結果だらうといつてゐる。錢湯の起源は新しいにしても、湯あみ、水あみの習慣は太古からあつたのである。かつ日本全國到る所に温泉のあることも、他國には例がないので、

伊豫道後の湯には天皇(一)も行幸になつて、推古四年の道後の碑文は、わが文學史中の最古文の一標本である。その外、伊香保(二)、有馬(三)、箱根等の湯は、皆歷史上に名高いものである。ドイツのケーニグスマークといふ人の書いた「日本及び日本人」といふ書には、日本人の入浴のことを賞揚して、これだけは大いに眞似すべきことと書いてある。ベルリン市などでは公衆衛生の必要から、到る所に浴場を公設して、勞動者等の入浴を奬勵してゐる。余は先年ドイツ留學中、或夏田舍の冷泉浴場に遊んで、日々入浴したが、同行のドイツ人は、どうしてもはいらうとはいはぬ。全身冷水摩擦をすれば、別に入浴の必要なしといふ論である。同人の言に、日本人の短命なのは、恐らくは溫浴を好む結果であらうなどと、いつてゐたジッチンゲン(五)といへば、人口八千許の町であるが、そこには一軒の湯屋もない。或滑稽雜誌で、若夫婦が新宅を探し歩いて、家主

(一)景行、仲哀、舒明、齊明、天智及び天武の諸天皇。
(二)群馬縣群馬郡。
(三)兵庫縣有馬郡。
(四)Königsmark.
(五)Sittingen. プロシヤ州の町。

と問答中、家主が「ここには湯殿もついてゐる。」といふと、夫の答に、「なに、我等はめつたに病氣にはならぬから、湯槽は入らぬ。」といつた記事を見たことがある。病氣にでもならなければ、湯に入らぬ積と見える。中學校の讀本に日本の記事を掲げて、入浴のことを記し、「ドイツも昔三十年戰爭(一)までは盛に入浴したが、その戰爭の疲弊後、この風が廢つたので、これは復古すべきことである。」と書いてあるのも見た。日露戰爭の最中でも、日本軍人の最も不自由に感じたのは、入浴の不便なことであつたらしい。とにかく日本人は身體を綺麗に洗つて、さつぱりとすることが好きである。清淨は日本の特性であると、西洋人の日本人に關した記事には必ず書いてあるチェンバレン(二)氏は、日本は多くの事がらを支那から輸入したが、これだけは日本特有だといつてゐる。支那あたりからくれば、殊にその差異の著しいのに感ずるであらう。

(一)西曆一六一八年ドイツで起つた戰爭。一六四八年まで續いた。
復古　昔どほりにすること。
(二)Chamberlain. イギリス人。日本學者。東京帝國大學文學部名譽教授。

黄泉國　死んだ人の住む國。

(一)日向國。宮崎郡檍村附近か。

潔癖　きれいずき。

爽快　さわやかに氣もちのよいこと。

懺悔　罪をくいること。

神遣　神から追ひやられること。

贖罪　罪をつぐのふこと。

日本人の全身浴は伊弉諾尊の神話に現れてゐる。伊弉册命がお隠れになつたのを黄泉國に行つてのぞいて、汚いものを見たといふので檍原(一)で御禊をなされた。御禊は身そゝぎで、身體を清淨に洗ふことである。目に見たばかりで身體が汚れるといふのは、潔癖の甚だしいものといはねばならぬ。すべて上代の日本人は、身體の汚も、精神の汚も殆ど同一に考へて居つて、身體を清淨にすれば、精神も自ら綺麗になると考へたのである。我等の入浴して垢を洗ひ落した後では、精神も自ら爽快になるから、かう考へたのも自然である。それで、若し道德上の罪惡を犯したものでも、身滌をすればその罪が消えて行くのである。多くの宗教で懺悔をすれば罪が消えると考へたと同樣、身滌をすれば罪が消えると考へたのである。素戔嗚尊が神遣に遣はれ給ふ時は、ひげを切り爪を拔かせられたので、これは贖罪の爲である。このはらひ

祝詞　祭や、はらひの時神に申し上げる詞。大祓詞はその一つである。

(一)もとの京都の御所。朱雀門はその南面の正門で、今葛野郡朱雀野村大字四京小車阪第一番田地の内といふ。

早川　流の早い川。

恒例　きまりとして行はれること。

の思想は、祝詞の大祓詞によくあらはれてゐる。これは毎年六月、十二月、皇城(一)の朱雀門で行はれたので、天下の萬民が、知らず識らずの間に犯したすべての穢や罪をはらふ爲である。その文を見れば、人々の罪はまづ河水と共に流れて行つて、早川の瀨にゐる瀨織津姫といふ神が大海に持出す。そこでは速開都姫といふ神がこれを一呑にのむ。それを氣吹戸主といふ神が根の國、底の國といふ汚い國へぷうつと吹放つてしまふ。根の國、底の國にゐる速佐須良姫といふ神は、これをどこかへやつて、なくしてしまふ。かういふ風に、すべての罪が郵便物のやうに順々に神たちの手に渡つて、遂に大海へさらりと流し棄てられるのである。この祝詞の中には、身體の汚のみならず、いろいろな罪惡も數へてある。即ち一年に二度づつ、半年間の汚を流してしまひ、忘れてしまつて、また新しい生活をしようといふのである。これは恒例の祓で

あるが、その外に臨時の祓といふものがあつた。また朝廷のみならず、民間でも祓の式を行つた。中古の物語や日記には、祓のことがあちらこちらに見える。百人一首の

風そよぐならの小川の夕暮は
みそぎぞ夏のしるしなりける

も六月の祓である。菅や茅で輪の形を作り、その輪を潜ることは、今も神社で行つてゐる。紙で形代を作つて、それに男女の別、年齢を記して祓ふことも、現今行はれてゐる。皆昔の餘波である。

(一)風のそよそよと吹くならの小川の夕方は誠に涼しくて夏とも思はれないが、みそぎを行ふので、あゝ夏だなとの意。

形代　人のかたち。

餘波　のこりもの。

三九　飯の味

相馬御風

(一)先年の大震災の當時、暫く私の家に避難してゐた親戚の子供たちのうちの一人が、或日私の子供に向かつて、頻りに

(一)大正十二年。

(二)新潟縣西頸城郡糸魚川町。

玄米の握飯のいかに旨いものであるかを話して聞かせたするとその話にそゝられて、私の家の子供たちまでが、そのおいしい玄米の握飯を食べて見たいといひだして、私たちに大笑させたことがあつた。

玄米の握飯の旨さを話した子供にとつては、それを食べた時の自分の氣持が、その旨さを味ははせてくれたのだとはわからずに、玄米の握飯そのものが旨いのだとばかり、思ひこんでゐるのであつた。しかし、私はその時その話に笑はせられながらも、こんなことをしみじみ思つて見た、

「いや、さうはいふものの、それがほんたうな飯の味なのであらう。家にゐる時にはとても食べる氣になれさうもない

やうな乾からびた握飯でも、山登などをして食べると、たまらなく旨く感じられることは、自分たちも經驗したところである。いはば私たちは毎日飯を食べてはゐるが、そのほんたうな味を味はひ得ることが極めて稀なのだ。それにしても、なぜ私たちは毎日三度三度さうした飯の味を味はふことができないのだらうか。」

それは私たちの心持が鈍つてゐるからだ。馴れると鈍る。鈍ると味がなくなる。飯ばかりでなく、自然に對しても、文明に對しても、また人に對してもそれは同じことだ。

平凡をさげすみ、嫌ひ、甚だしきは、それをのろふやうにさへなりがちな私たちの心――それはつまり鈍つてゐるからだ。徒に變化を求めつゝ、終に何物にも滿たされないやうな心――それはつまり鈍つてゐるのだ。心さへ常に新たであれば、何物のうちにも常に新たな味を味はふことができるはずだ。徒に變化をのみ求めながら、終に何物をも得ることのできない生活よりも、日々に新たな心を以て、この平凡な生活のうちに限りなき味を味はひ得るやうな生活が、眞に私たちにとつての幸福な生活でなければならぬ。童心の尊さを私たちが讃美して止まない所以もそこにあるのだ。

「成人の後までも幼兒の心を失はない人」を最も尊しとした哲人の考も、そこにあつたのであらう。

日々に、刻々に心を新たにして生きる工夫――それを私

たちは最高な修養としたいものである。

改訂

女子新國文　卷四　終

大正十二年十二月十五日　訂正再版發行
大正十五年九月二十八日　訂正三版發行
昭和元年十二月二十五日　訂正四版印刷
昭和元年十二年二十七日　訂正四版發行

改訂　女子新國文　奥附

編者　賀矢一
發行者　合資會社　冨山房
代表者　坂本嘉治馬
印刷者　新井修平

定價
自至卷卷一四　各金四拾貳錢
自至卷卷五八　各金四拾錢
昭和三年度臨時定價
自至卷卷一四　各金七拾錢
自至卷卷五八　各金六拾六錢

著作權所有

發行所　合資會社　冨山房
東京市神田區通神保町九番地
電話神田二四二・二四三・二四三番
振替口座東京五〇一番

電新堂印刷所印行

検印　HIGA　検　賀芳
浦野製

五年二学年

五組

大下智恵子